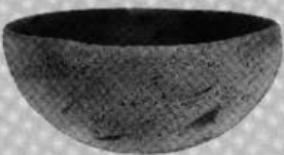


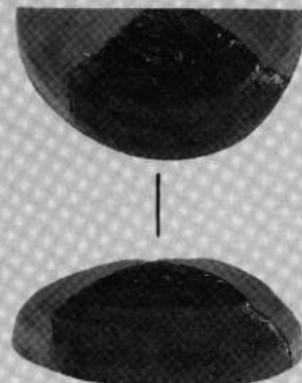
SD-2 (19~20)、SD-6 (22~24)、SD-7 (25) 出土遺物



29



28



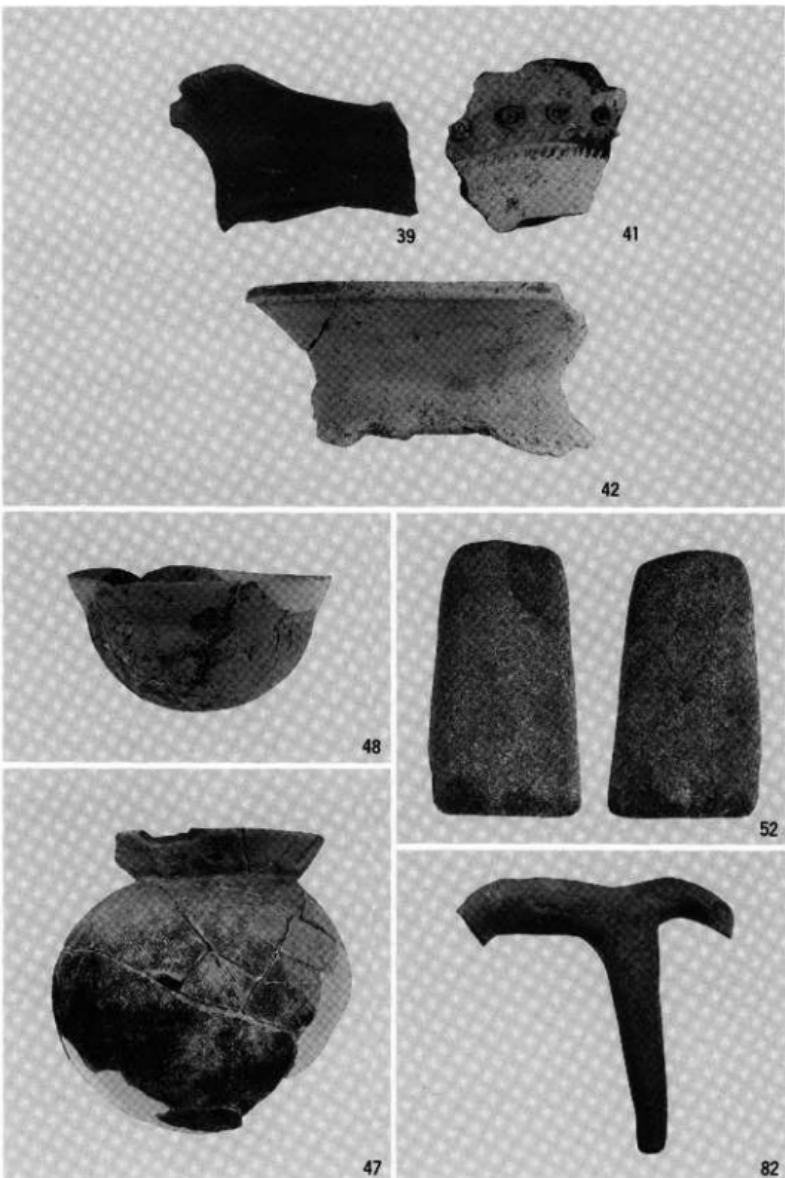
32



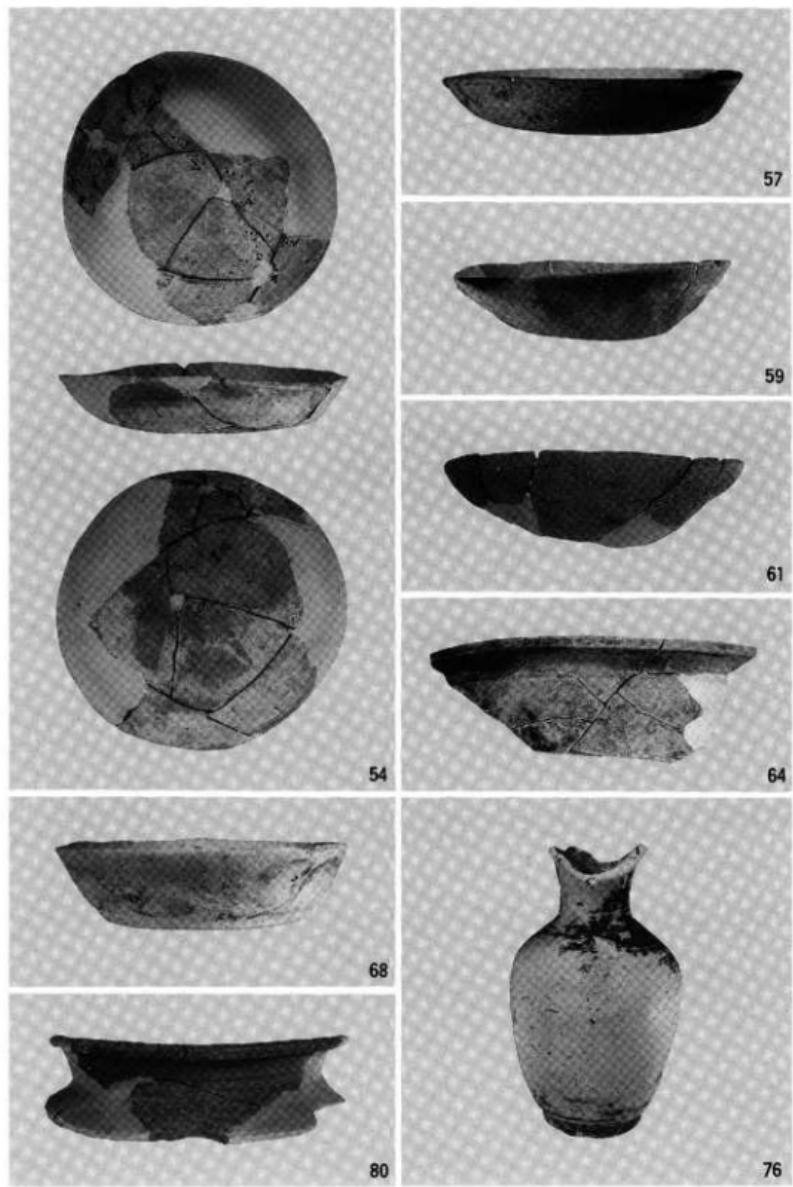
34

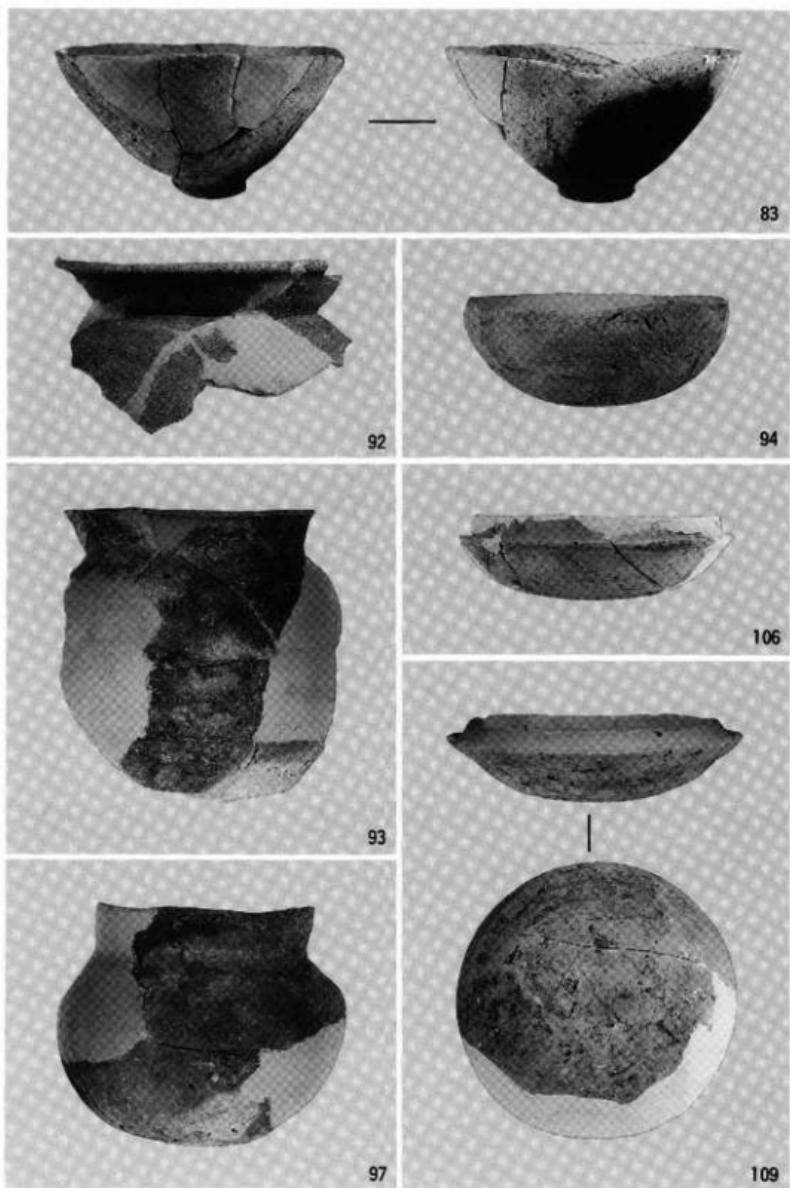


37



NR—1 出土遺物

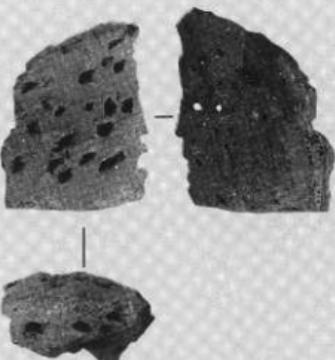




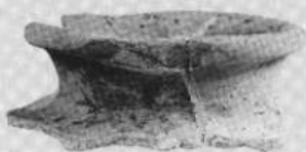
包含層出土遺物



110



111



118



116



120

包含層出土遺物



### Ⅲ 花岡山遺跡(第1次調査)発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市東音寺 824番地他10筆で実施したバスケットボールコート建設に伴う発掘調査の概要報告である。
1. 本書で報告する花岡山遺跡（第1次調査）の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が大阪経済法律学園から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は昭和62年1月12日から昭和62年3月28日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は 695m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては伊藤潔・大田頃好孝・竹田久治・田中賢人・柳井正・森川壯一・横山聖二（以上大阪経済法科大学考古学研究会）が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し平成元年7月30日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－八元聰志・中西隆子、図面レイアウト－原田、図面トレース中西、写真撮影－原田、浄書－中西が行った。
1. 調査に関して、御指導、御協力をいただいた方々は以下のとおりである。記して感謝の意を表したい。  
村川行弘・山本昭・橋本久・瀬川芳則・中井秀樹・大阪経済法科大学
1. 本書の執筆は主に原田が担当したが、第4章出土遺物観察表は、八元が担当した。
1. 全体の編集は原田が行った。

## 本　文　目　次

第1章　調査に至る経過.....	133
第2章　地理・歴史的環境.....	135
第3章　調査概要.....	139
第4章　出土遺物観察表.....	156
第5章　まとめ.....	166

## 挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図および調査位置図	134
第2図	調査区設定図	139
第3図	第1調査区・第1調査面平面図	141-142
第4図	SK-1・SD-1 平断面図	143
第5図	SK-1 出土遺物実測図	144
第6図	SD-1 出土遺物実測図	145
第7図	第1調査区包含層出土遺物実測図1	146
第8図	第1調査区包含層出土遺物実測図2	150
第9図	第1調査区包含層出土遺物実測図3	151
第10図	第1調査区包含層出土遺物実測図4	152
第11図	第2調査区(117-123・125)・第3調査区(124) 包含層出土遺物実測図	153
第12図	第3調査区(西区) 第1調査面検出遺構平断面図	154
第13図	第3調査区(東区) 第1調査面検出遺構平断面図	155

## 図 版 目 次

図版一	第1調査区 第1調査面全景
同 上	第2調査面全景
図版二	第1調査区 SK-1 全景
図版三	第1調査区 土師器甕出土状況
同 上	雁振瓦出土状況
図版四	第2調査区 第2調査面全景
第3調査区	第1調査面全景
図版五	第1調査区 SK-1・SD-1 出土遺物
図版六	第1調査区 包含層出土遺物1
図版七	第1調査区 包含層出土遺物2
図版八	第1調査区 包含層出土遺物3
図版九	第1調査区・第2調査区出土遺物

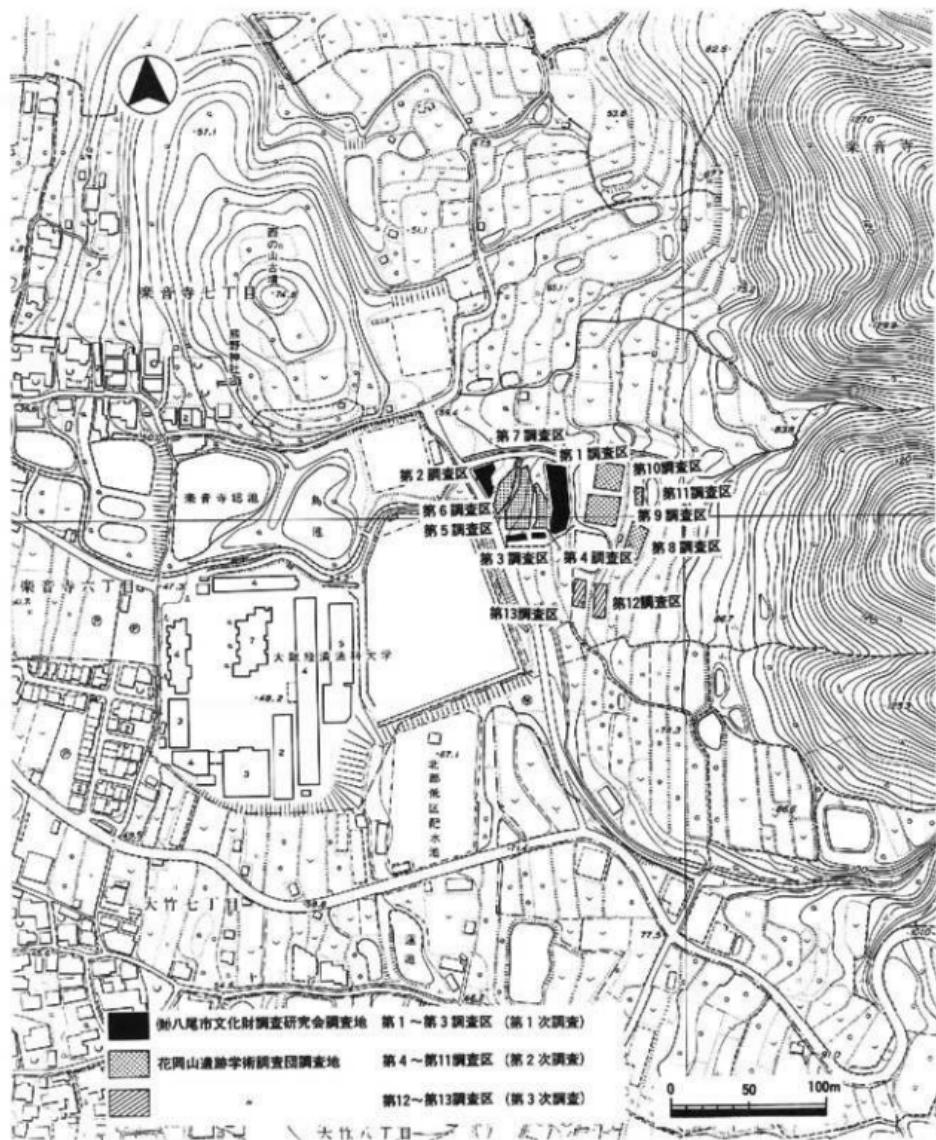
## 第1章 調査に至る経過

花岡山遺跡は、八尾市北東部の生駒山西麓部の標高60~70m地点に所在する遺跡である。当遺跡発見の契機は、昭和53年9月に八尾市大竹705で八尾市水道局が実施した北部低区配水池の工事中に、当地域一帯で分布調査を実施していた大阪経済法科大学考古学研究会の一員により、中世時期の遺物を包含する土層の存在が確認されたことによる。発見当時、工事がかなり進行していたようであったが、幸いにも構築予定地の南西部で東西50m・南北15mに亘って包含層が存在することが確認された。以上のことから包含層に関連した遺構の存在を確認する目的で緊急に、発掘調査が昭和53年12月1日から12月22日にかけて大阪経済法科大学考古学研究会により実施された。<sup>註1</sup>

その結果、鎌倉時代に比定される柱穴群・礎石・小溝等を検出し、この地域一帯に居住地が存在したことが明らかになった。さらに、二次堆積の遺物ではあるが、縄文時代の石器や、古墳時代の須恵器・円筒埴輪等の破片が出土しており、花岡山遺跡は複合遺跡の性格を帯びた遺跡である可能性が強いと考えられていた。

このような情勢下、大阪経済法科大学から、八尾市東音寺824番地において、バスケットボールコートを造成する旨の申請書が、八尾市教育委員会文化財室に提出された。八尾市教育委員会文化財室では、当該地が花岡山遺跡推定範囲に近接することから、遺構および遺物包含層の有無を確認するため試掘調査が必要であると判断した。昭和61年10月13日・14日に土木工事予定地内で2×2mの調査区を4ヶ所設定して試掘調査を実施した結果、弥生時代中期に比定される土器片および中近世に比定される土器片を含む土層の存在が認められた。

この試掘結果から、八尾市教育委員会文化財室では、八尾市文化財保存に係る事務取扱い要綱に基づき発掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通告した。その結果、バスケットボールコート造成により遺構の破壊が予想される部分を対象に、記録保存に必要な資料を作成する目的で発掘調査を実施することが二者間で了解された。発掘調査は、財團法人八尾市文化財調査研究会が主体となって実施することが、八尾市教育委員会文化財室・大阪経済法科大学・財團法人八尾市文化財調査研究会の三者間で決定され、契約締結後現地調査に着手した。現地発掘調査期間は、昭和62年1月12日から3月28日までで、調査面積は695m<sup>2</sup>を測る。なお、本調査中に当初の計画が一部変更され、新たに発掘調査が必要となつたため、以後の発掘調査については、大阪経済法科大学が花岡山遺跡学術調査団を組織して発掘調査を実施している。したがって、当発掘調査を花岡山遺跡第1次調査とし、花岡山遺跡学術調査団が実施した調査を花岡山遺跡第2次調査（昭和62年4月1日～7月6日）、花岡山遺跡第3次調査（昭和62年



第1図 調査地周辺図および調査区位置図

7月7日～8月20日）と呼称する。なお、第2次調査・第3次調査については、花岡山遺跡学術調査団が「河内花岡山遺跡」大阪経済法科大学考古学研究報告第9集として昭和63年7月に調査報告書が刊行されている。

註1 大阪経済法科大学考古学研究室花岡山遺跡発掘調査団『花岡山遺跡発掘調査概報』1979. 3

## 第2章 地理・歴史的環境

河内平野の東に位置し南北方向に延びる生駒山地は、標高642mを測る生駒山を主峰とし、高安山、高尾山など数多くの山々で構成されており、山頂稜線付近で東側を奈良県、西側を大阪府に区画している。生駒山地の岩石組成は主峰の生駒山付近は閃緑岩の残丘をなすが、その周辺は風化され易い花崗岩から成る。したがって、急傾斜をもつ大阪府側の西麓は水年の風化および雨水による浸食作用で多量に土砂が流下し、谷口付近に数多くの扇状地を形成してきた。

花岡山遺跡が位置する八尾市の北東部も、谷口扇状地が発達した地域で、さらに傾斜変更線付近には洪積世丘陵である西の山・花岡山（消滅）・向山が存在しており、これらが融合して複雑な地形を呈している。

花岡山遺跡は海拔60～70m前後の山麓線上に位置し、現在の行政区画では八尾市神立、棄音寺六丁目・七丁目にあたり、北側は東大阪市横小路二丁目と市境を区画している。

花岡山遺跡内では、当調査（第1次調査）以降、花岡山遺跡学術調査団が第2次・第3次調査を実施しており、新たな知見が報告されている。ここでは、これらの調査成果を含めて花岡山遺跡周辺を時期毎に概観してみたい。

当遺跡周辺で旧石器時代に比定される資料は、生駒西麓部を中心に数例が知られているにすぎず、不明な点が多い。東大阪市域では、山畠遺跡でナイフ形石器・尖頭器、坊主山遺跡、千手寺山遺跡からはナイフ形石器、正興寺遺跡からは二次加工を施した石器が採集されている。<sup>註2</sup>  
一方、八尾市域では恩智遺跡からナイフ形石器1点が採集されている。<sup>註3</sup>

統く、縄文時代草創期には、生駒西麓の草香山（東大阪市）と六万寺（東大阪市）から有舌<sup>註4</sup>尖頭器が出<sup>上</sup>しているが、いずれも土器を伴わず単独で出土している。<sup>註5</sup>

縄文時代早期の遺跡には、神並<sup>註6</sup>遺跡（東大阪市）がある。神並遺跡は、生駒西麓の中位段丘上（標高30m前後）に位置するもので、土器は押型文土器が主体となる。

縄文時代前期の河内平野の環境は、温暖化に伴う海進現象が顕著で、海岸線が内陸部に及んだものと考えられ集落の位置が前代に比して、やや低位置に移動したものと推定されている。この時期の遺跡には恩智<sup>註7</sup>遺跡がある。恩智遺跡は扇状地扇端部（標高10～15m）に位置するも

ので、前期前葉の北白川下層Ⅱ式の段階で成立している。

縄文時代中期においては、恩智遺跡が継続して営まれている他、中期初頭から中葉にかけては瀬戸内地方を中心に分布する船元Ⅰ式が出土した縄手遺跡（東大阪市）と、中期末から後期初頭には馬場川〇式土器（中津式併行期）を伴出した馬場川遺跡（東大阪市）<sup>註8</sup>が恩智遺跡同様、扇状地局端部（標高15~20m）に成立している。また、当調査地（第1調査区）および大竹遺跡（八尾市）<sup>註10</sup>からは、前期~中期に比定される石匙が出土しており、周辺に遺跡が存在した可能性が高い。

縄文時代後期においては、縄手遺跡・馬場川遺跡・恩智遺跡が継続して営まれている他、花岡山遺跡・楽音寺遺跡（八尾市）<sup>註11</sup>が新たに出現している。土器には、後期初頭においては瀬戸内系の中津式、前半では関東系の堀ノ内式、瀬戸内系の津雲A式が認められる。なお、中期から継続する三遺跡からは、後期前半の段階で漁撈活動を示す石鍤の出土が認められており、土器を媒介とする交流の中で、新しい生業体系が生じたものと推定されている。<sup>註13</sup>

晩期には、馬場川遺跡・恩智遺跡が営まれている。馬場川遺跡では晩期前半、恩智遺跡では晩期中葉に大規模な集落を形成していたようである。特に、恩智遺跡では晩期中葉に比定される上器集石から在地の土器とともに、東北系の大洞B-C式、C式や瀬戸内系の原下層式が出土しており、当時の活発な地域間交流が窺える。また、縄手遺跡・鬼塚遺跡（東大阪市）<sup>註15</sup>からは、晩期終末期に比定される長原式と弥生時代前期第I様式中段階の土器が出土しており、この地域の縄文時代から弥生時代への移行過程を知るうえで示唆的である。

弥生時代になると稲作の導入に伴って遺跡が平野部の低湿地帯に移動したようで、生駒西麓部では前代に比して遺跡が減少している。続く中期前半には水越遺跡（八尾市）<sup>註17</sup>が出現しており、稲作技術や水利管理の進展の結果、生駒西麓末端部の開発が可能となったようである。

後期の遺跡は、西麓部末端に、馬場川遺跡・上六万寺遺跡（東大阪市）・大竹遺跡・大竹西遺跡（八尾市）、平野部に北鳥池遺跡（東大阪市）・太田川遺跡（八尾市）がある他、生駒西麓部の海拔80mには高地性集落である岩瀧山遺跡（東大阪市）<sup>註23</sup>が出現している。

古墳時代前期の遺跡には、西の口遺跡（東大阪市）・水越遺跡がある。中期の遺跡には前期から継続する西の口遺跡がある他は明確でない。後期前半には、多量の滑石製品が出土した池島遺跡（八尾市）の他、水越遺跡からも玉作りに関係した遺物が出土しており、八尾市神立に所在する玉祖神社との関連が想起されよう。一方、古墳については、前期の西ノ山古墳・花岡山古墳、中期の心合寺山古墳、中期末から後期の鏡塚古墳に至るまで、累積的形成を示す楽音寺・大竹古墳群が存在している。さらに、これらの古墳群の南方に位置する後期中葉の愛宕塚古墳、後期後半の芝塚古墳を含めて、有力集団の安定した政治勢力を伺い知ることができよう。その他、縄手遺跡の調査で発見された中期初頭のえの木塚古墳（東大阪市）の他、調査地東方<sup>註26</sup><sup>註27</sup>

の標高 150m には組み合せ式箱式石棺を伴出した中期中葉の中ノ谷古墳（八尾市）中期末の大賀世古墳<sup>註29</sup>（東大阪市）がある。後期の群集墳としては、山畠古墳群・五里山古墳群（東大阪市）<sup>註30</sup>の他、高安古墳群（八尾市）が牛駒西麓部に成立している。終末期の古墳には、凝灰岩製削抜式の家形石棺が直葬されていた核山古墳（八尾市）、石棺の底部が出土したおんじ山古墳（八尾市）<sup>註31</sup>、高安山山頂の標高 480m に位置する高安山 1・2 号墳があり、立地条件や埋葬主体の形状が多様化している。

飛鳥・奈良時代の集落は現地点では不明であるが、心合寺跡が心合寺山古墳の南西部に位置する他、服部川には高麗寺跡があり、寺域周辺で奈良時代前期以降の集落の存在が推定できる。<sup>註32</sup> また、心合寺跡周辺の花岡山古墳・心合寺山古墳・鏡塚古墳の墳丘からは、奈良時代の藏骨器<sup>註33</sup>が出土しており、心合寺に関連した人々がこの時期、墓地として利用していたようである。

平安時代の集落としては、平安時代中期を中心とする西の口遺跡がある。寺院跡としては、南東方に玉祖神社の神宮寺であった圓光寺跡<sup>註34</sup>（平安時代前～明治）がある他、北方 200m には大光寺跡（平安時代後～室町時代）が存在している。なお、南方 400m には、向山瓦窯<sup>註35</sup>（平安時代後期）があり、ここで焼かれた瓦が、京都の醍醐寺・平等院に供給されている。

続く、鎌倉時代の集落は、大竹遺跡・水越遺跡がある他、第 2 次調査の第 8・9 調査区で確認されている。

室町時代の集落は、福万寺遺跡の他、第 2 次調査の第 9 調査区で確認されている。<sup>註36</sup>

#### 註記

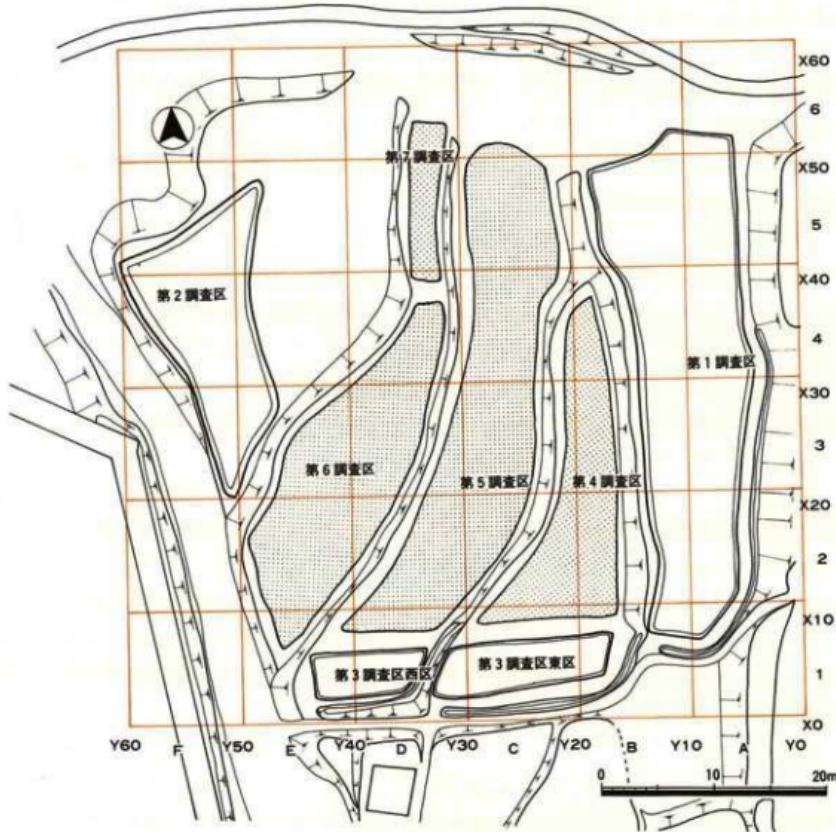
- 註1 花岡山遺跡学術調査団『河内花岡山遺跡』大阪経済法科大学考古学研究報告第 9 集 1988
- 註2 藤井直正・都出比呂志『原始・古代の枚岡』東大阪市考古学研究会 1967
- 註3 米田敏幸・佐藤良二『八尾市恵智遺跡の石器再考』『旧石器考古学』24 旧石器文化談話会 1982
- 註4 梅原木治・小林行雄・藤岡謙次郎「大阪府下に於ける史前遺跡の調査」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第一二輯』1942
- 註5 前掲註 2
- 註6 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会『梅原遺跡 II』1987
- 註7 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』1980
- 註8 稲子遺跡調査会『稲子遺跡一』1971  
東大阪市遺跡保護調査会『稲子遺跡』1976 \*
- 註9 東大阪市教育委員会『馬場川遺跡 III』1975  
\* 『馬場川遺跡 IV』1976
- 註10 原田修・久貝健・島田和子『清原得義所藏考古資料図録 第 1 誌高安の遺跡と遺物』『大阪文化誌 第二卷・第二号・通巻第 6 号』(財)大阪文化財センター 1976
- 註11 前掲註 1
- 註12 (財)八尾市文化財調査研究会『槇音寺遺跡』昭和 58 年度事業概要報告

- (財)八尾市文化財調査研究会報告 5
- 註13 宮野淳一 「河内における繩文後期文化の成立」『関西大学考古学研究室創設三十周年記念考古学論叢』
- 註14 八尾市教育委員会 『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－』  
八尾市文化財報告14 1987
- 註15 東大阪市教育委員会 『綿手遺跡・若江遺跡の調査－昭和61年度－』 東大阪市埋蔵文化財伝承地調査概要28 1987
- 註16 大阪府立花園高等学校地歴部 「鬼城遺跡」「河内古代遺跡の研究」 1970
- 註17 (財)八尾市文化財調査研究会 『水越遺跡発掘調査概要報告』「八尾市恩賜文化財発掘調査概要」  
(財)八尾市文化財調査研究会報告3 1983
- 註18 東大阪市遺跡保護調査会 「上六万寺遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報』 1975
- 註19 八尾市教育委員会 「河内大竹遺跡」－八尾市水道局低区第配水池配水管布設用地内埋蔵文化財発掘調査報告－ 1980
- 註20 前掲註10
- 註21 大阪府立花園高等学校地歴部 「北島池遺跡」「河内古代遺跡の研究」 1970
- 註22 (財)八尾市文化財調査研究会 『太田川遺跡発掘調査概要報告』「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」 (財)八尾市文化財調査研究会報告3 1983
- 註23 東大阪市教育委員会 『岩滝山遺跡』 埼蔵文化財伝承地調査概報5 1971
- 註24 (財)東大阪市文化財協会 『西の口遺跡第1次発掘調査概要』－私立網干中学校分校場建設工事に伴う第1次調査－ 1987
- 註25 大阪府教育委員会 「池島遺跡発掘調査概要・Ⅰ」－八尾市福万寺地区－ 1986
- 註26 大阪府教育委員会 『八尾市高安跡集墳の調査(第2次)－昭和42年度脇部川その他の地区調査概要』 1968
- 註27 (財)八尾市文化財調査研究会 『神立芝塚古墳現地説明会資料』 1989
- 註28 東大阪市遺跡保護調査会 「綿手遺跡2」 1976
- 註29 前掲註10
- 註30 前掲註2
- 註31 前掲註10
- 註32 八尾市教育委員会 「神立おんち山古墳調査概報」 1968
- 註33 大阪府教育委員会 「高安城跡範囲確認調査概要・Ⅰ」－八尾市脇部川所在－ 1981
- 註34 前掲註10
- 註35 前掲註10
- 註36 a 原田修 「心寺寺古墳出土の藏骨器」『大阪文化誌 第二巻、第二号・通巻第6号』  
(財)大阪文化財センター 1976  
b 安井良三 「日本における古代火葬墓の分類」－歴史考古学的研究序論－『日本考古学論集6 墓基と経塚』 1987
- 註37 前掲註10
- 註38 前掲註10
- 註39 八尾市教育委員会 「上之島・福万寺遺跡：市立板称第3山本小学校校舎建設に伴う発掘調査概要」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』 1983

### 第3章 調査概要

#### 第1節 調査の目的と方法

調査予定地一帯は、生駒山地西麓の緩斜面（標高67.2～61.6m）に位置し、西側に向かって傾斜する地形を呈している。調査地の景観は、緩斜面を段階状に整備してテラス部を形成するもので、調査前まで水田として利用されていた。テラス部分は5段（最下段から上段に向かって1～5と呼称する）あり、面積は下位に行くに従って減少する傾向で、最下段と最上段の比



第2回調査区設定図

高差は約5.5mを測る。このうち、第1調査区をテラス5の全域、第2調査区をテラス1の全域、第3調査区をテラス3・テラス4の南部に設定し、第1調査区から順に調査を実施した。

調査は、教育委員会文化財室の発掘調査指示書に従って、上層よりすべて人力掘削を実施し、試掘調査で確認された弥生時代中期および中近世の遺物を含む包含層と遺構の平面的な関りを追求することを目的とした。調査区の区割りに当っては、第1次調査以後の調査を考慮して、東西60m・南北60mに亘って調査区を設定した。設定した一区割単位は10m四方で、南東隅を基準点（第VI系国土座標 X-151,020,000, Y-32,070,000）にし、東西線はアルファベット（東からA-F）・南北線は数字（南から1-6）で呼称した。地区名の表示は、一区割の南東隅に交差する南北線・東西線を用い、1A-6F区と呼称した。

## 第2節 検出遺構出土遺物

### 1) 第1調査区

調査予定地東端のテラス5に設定した調査区で面積400m<sup>2</sup>を測る。調査では2面を（第1調査面・第2調査面）を調査対象面とした。

#### <第1調査面>

第1調査区の堆積土層は上層から、第1層暗灰色砂質土（耕土）第2層淡茶灰色砂質土（床土）までは、共通した層相であるが、以下は地山ラインに沿って堆積しているが、一部は後世に整地が行なわれているため複雑な層相を呈している。したがって、中世末期の遺構を検出した地表下30cm前後付近においては、東部では黄茶～茶褐色砂礫土（地山）・西部および南部では淡灰茶色砂質土と同一面で土層の差異が認められた。この土層上面で集石遺構・土坑1基（SK-1）・溝1条（SD-1）を検出した。

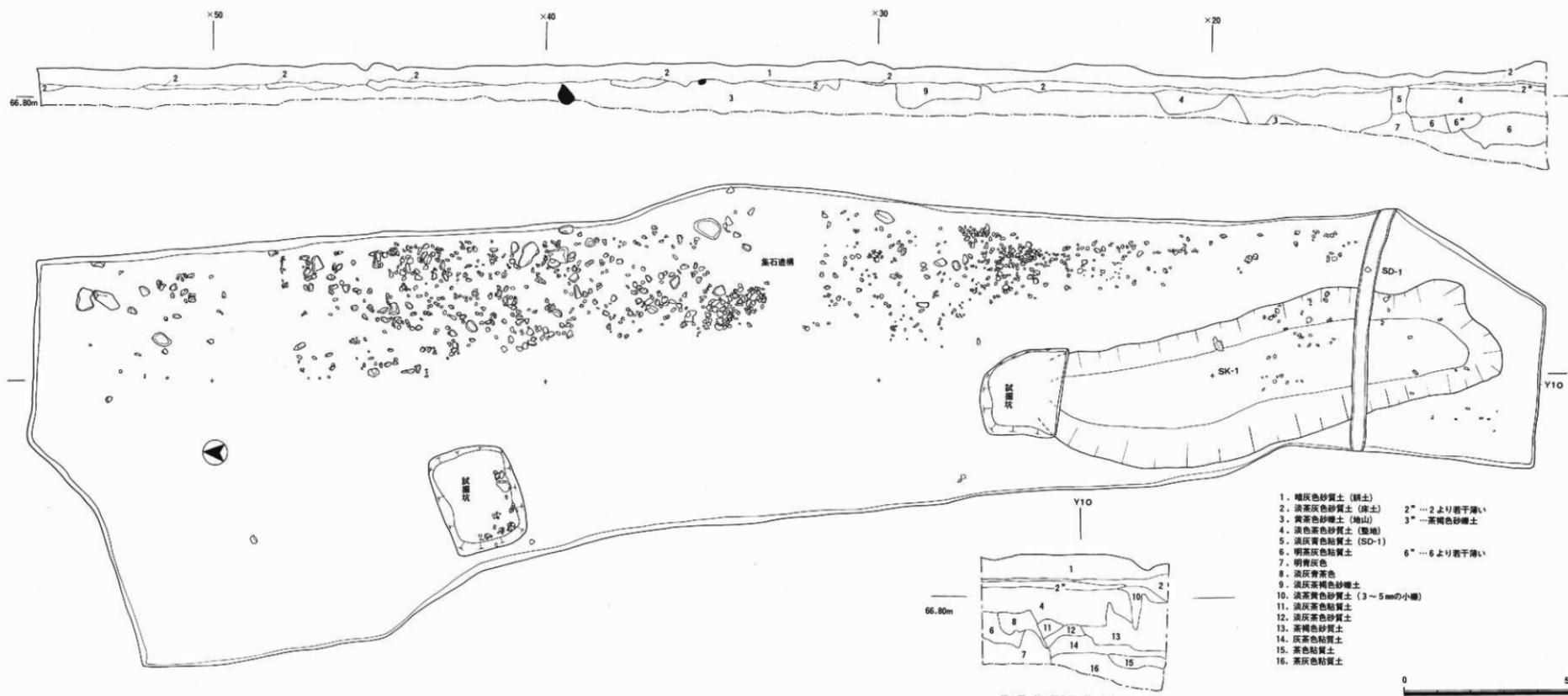
#### 集石遺構

調査区の東部で検出した。南北方向に帯状に広がるもので、東西1~5m・南北36mを測る。一部地山に含まれる風化した花崗岩を除けば挙大から人頭大の花崗岩で構成されている。ただ配置等の規則性が判然としない点や、集石上面のレベルが不揃いな点、さらに南北方向に延びる集石遺構と調査区東側に位置するテラス状地形西側の南北ラインが一致することから、テラス状に整備した際に落とし込まれた石で集石状を呈したものと理解できよう。集石遺構から鎌倉時代初頭から室町時代に至る日常雜器の小破片が少量出土している。

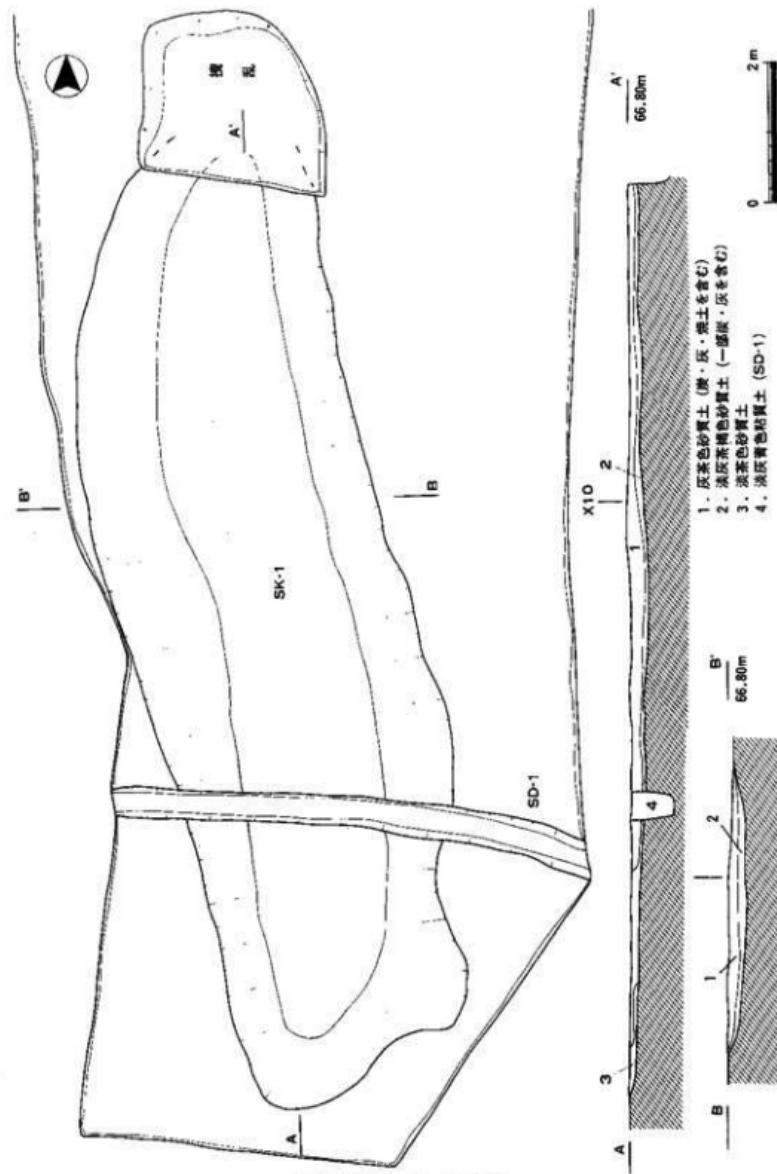
#### 土坑（SK）

##### SK-1

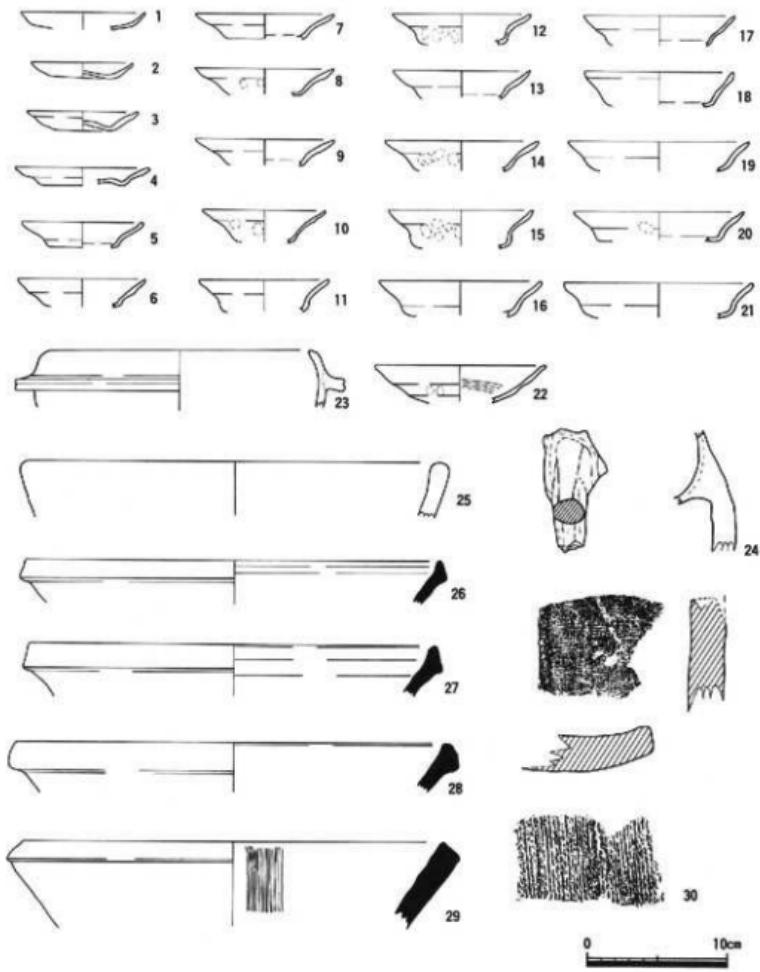
調査区の南部で検出した。上面の形状が南北方向に長い溝状を呈する土坑で、北端は試掘坑で切られている。東西幅1.8~4.2m・南北幅13.1m・深さ5~25cmを測る。内部の堆積土層は、



第3図 第1調査区・第1調査面平面図



第4図 SK-1-SD-1平面面図



第5図 SK-1出土遺物実測図

炭・灰・焼土（砂を含む）を多量に含む第1層の灰茶色砂質土、第2層の淡灰茶褐色砂質土と南部のみ堆積していた第3層淡茶色砂質土である。

遺物は主に上層からコンテナ約1箱程度出土したが、そのうちの半分は砂を含んだ焼土塊であった。出土遺物の内訳は、土師器小皿・中皿1655・土釜4、瓦器椀 201・足釜2、瓦質火舍

1、須恵器鉢7、備前焼擂鉢1、丸瓦3・平瓦29であるが、ほとんどが小破片である。

そのうち、図示できたものは土師器小皿(1~18)・中皿(19~21)、瓦器椀(22)・足釜(23~24)、瓦質火舎(25)、須恵器鉢(26~28)、備前焼擂鉢(29)、平瓦(30)の30点である。

土師器小皿(1~18)は口径9.5cm・器高1.8cm前後を測る。形態の違いから4種(1~4類)に細分した。1類が丸底の底部から口縁部が斜上方へ伸びるもの(1)。2類が上げ底の底部から口縁部が斜上方へ伸びるもの(2~4)。3類が平坦な底部から外反気味に上外方へ立ち上がりた後、角度を斜上方へ変えるもので、端部は尖り気味で終る。口縁部外面の指頭圧痕が顕著である(5~17)。4類が平坦な底部から口縁部が斜上方へ伸びるもの(18)である。色調は、大半が淡黄褐色系で、胎土にはくさり薙を多量に含んでいるものが多い。

土師器中皿(19~21)は口径13.0cm・器高2.0cm前後で、器高は小皿と大差が認められない。形態は、小皿の3類と共通する。色調・胎土ともに小皿と共通する。

瓦器椀は1点のみ(22)図示できたが、他の資料も含めてすべて和泉型であった。(22)は皿状を呈するもので、高台の有無は不明である。瓦器足釜には、口縁部のみ遺存のもの(23)と脚部のみ遺存のもの(24)がある。(25)は瓦質火舎で、口縁端部は丸味をもって終る。

須恵器鉢(26~28)はすべて東播系で、口縁端部が上下に拡張し外傾する面をもつ(26・27)と端部が丸味を持って終る(28)がある。

備前焼擂鉢(29)は、胎土に長石粒を多量に含むもので、開墾編年の3類に当る。

(30)は平瓦の小破片で、内面に粗い布目、外面に継位の繩目タタキを施している。

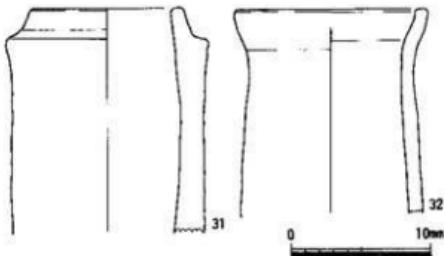
以上のように出土遺物には、時期幅が認められた。また、土坑内からはこれらの土器類の他、炭・灰とともに焼土塊が多量に出土していることから、廃棄物等の焼却を行った焼土坑的な性格を帯びた遺構と考えられよう。最も新しい時期に比定される遺物からみて、遺構の廃絶時期は15世紀初頭の一時期が考えられよう。

#### 溝(S D)

##### S D - 1

調査区の南部で検出した。SK-1の南部を東西方向に切る遺構で、検出部分で7mを測った。幅45~50cm・深さ40~60cmで西に向かって傾斜している。内部堆積土層は淡灰青色粘質土である。

遺物は淡灰青色粘質土層から少量出土した。出土遺物の内訳は、土師



第6図 SD-1出土遺物実測図

器小皿20、瓦器碗5、瓦質土管9で、土管の一部を除いてすべて小破片である。

そのうち、図示できたものは瓦質土管2点(31・32)である。ともに、内面に布目痕、外面にはナデ調整が行なわれている。なお、この溝は方向からみて調査区の東方に存在する池と関連する遺構と考えられる。したがって、出土した土管は、池から排水する水利施設の一部であったと推定される。時期は、近世初頭以降と考えられるが、詳細は不明である。

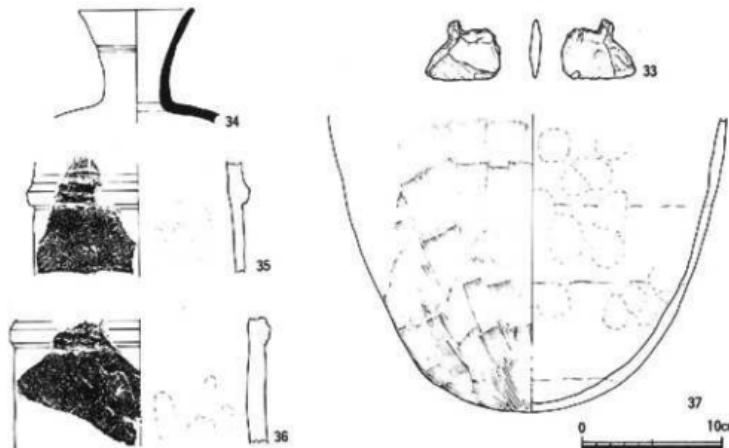
#### <第2調査面>

地山面(標高66.7~65.8m)を調査対象とした。地山面は西側に傾斜面を持つもので、調査区内の東西の高低差は0.9mを測る。地山面は花崗岩の風化した砂粒が優勢な土質で、表面には露頭した花崗岩が散見された。なお、南部においては、南側に傾斜する谷状地形を呈しており、その部分についてはグライ化した粘質土の堆積が認められた。遺物は地山直上で縄文時代中期の石匙(33)、古墳時代後期の甕(37)が出土した。

#### 包含層出土遺物

包含層からはコンテナにして5箱程度出土した。出土遺物は第2層~第4層から出土したが、数量的には第3層が大半を占めた。地区別では調査区の北部でやや出土量が少なかった以外はほぼ全域から出土した。

出土遺物は、土器類のほか屋瓦、銭貨、石器、焼土塊がある。土器類は大半が小破片で遺存状態は悪い。出土遺物の時期別の割合は、9割余りが鎌倉時代~室町時代後期に比定されるもので、他に縄文時代中期・古墳時代後期の石器・土器が出土している。そのうち、図示できた



第7図 第1調査区包含層出土遺物実測図1

ものは、84点（33～116）である。

図示した遺物の内訳は、土師器—円筒埴輪2（35・36）・長胴壺1（37）・小皿22（38～59）・中皿18（60～77）・土釜2（87・88）・壺2（97・98）、須恵器—長頸壺1（34）・鉢6（90～94・96）・壺1（105）・不明1（104）。瓦器—椀7（78～84）・足釜2（85・86）、瓦質擂鉢1（89）・こね鉢1（95）・火舍1（110）。中国製磁器—白磁続1（100）・青磁碗3（99・101・102）。国産陶磁器—瀬戸焼皿1（103）・常滑焼壺2（106・107）・備前焼擂鉢2（108・109）・擂鉢1（112）。屋瓦—雁振瓦2（113・114）・平瓦1（115）。石製器—石匙1（33）・石鍋（111）・砥石1（116）である。

円筒埴輪は2点（35・36）出土した。2点ともにタガの断面形状が台形を呈するもので、外側は継位のハケ、内面は指ナデが施されている。

長胴壺（37）は底部から体部中位まで遺存するもので、内面は指頭圧痕、外側は継位のハケを施す。

土師器小皿（38～59）は口径7.6～9.4cm・器高1.0～1.5cmを測るもので形態の違いから8類（1～8類）に細分した。1類は平坦な底部から斜上方へ伸びた後、口縁部が外反して終るもの（38～42）。2類は口縁端部が肥厚気味で終るもの（43）。3類は口縁端部が上方へつまみ上げ気味で終るもの（44～46）。4類は口縁端部が丸味を持って伸びるもの（47～49）。5類は口縁部が斜上方へ伸びるもの（50～56）。6類はやや深めの器種で、口縁部は強いヨコナデのため口縁部中位から外反するもの（57）。7類は上げ底の底部で、口縁部は斜上方へ伸びるもの（58）。8類は口縁部が内側に折り返され、断面の形状が逆「く」の字を呈するもの（59）である。

土師器中皿（60～77）は、口径10.0～13.3cm・器高1.5～2.2cmを測るもので、形態の違いから5類（1～5類）に細分した。1類が平坦な底部から口縁部が斜上方へ伸びた後、端部が上方へつまみ上げられるもの（60）。2類は口縁部中位～上位付近で外反するもの（61～66）。3類は口縁部がやや内湾気味にのびるもの（67）。4類は口縁部が斜上方へ伸びるもの（68～70）。5類は口縁部が強いヨコナデのため、口縁部中位から外反するもの（71～77）である。

土師器土釜は2点（87・88）図示できた。（87）はやや内傾する頸部と内折する口縁部をもつ。昔原分類の大和H型cに当る。（88）は内傾する頸部に「く」の字形に外反する口縁部が付く。昔原分類の河内B型dに当る。

土師器壺（97・98）は2点ともに大型の壺で、口縁部端部は水平方向に拡張し、内側に肥厚する。

須恵器長頸壺（34）は、口頸部がラッパ状に広がるもので頸部中位に2本の沈線が廻る。

須恵器鉢は6点（90～94・96）図示できた。すべて東播系のものである。口縁部が上下に拡張、し端部外側が強いヨコナデのため凹面を呈するもの（90・91・93～94・96）と口縁部がや

や内湾気味で、端部が丸く終るもの（92）がある。後者がやや新しい様相を示している。

(105) は壺の体部と考えられ外面に格子目叩き成形痕が遺存している。このように、外面に格子目叩き成形をする例は、香川県綾南町陶古窯跡群（十瓶山北麓窯）、岡山県勝間田古窯跡群（進上谷窯）出土資料に認められるが生産地は限定できない。

(104) は上下2本の沈線間に※の文様を押印している。器種や帰属時期は明確でない。

瓦器碗は大和型が2点含まれていた以外はすべて和泉型であった。図示できたものは7点(78~84)である。(78・83)は扁平な器形で、形骸化した貼付け高台が付く。見込みに渦巻状ヘラミガキが施されている。(79)は高台が消滅し、皿形を呈するもので、見込みに渦巻状ヘラミガキが施されている。(84)も皿形を呈するが、内面のヘラミガキは不明である。(80)は大和型に分類されるもので、外面のヘラミガキの特徴から掲載した和泉型の瓦器碗の時期よりやや古い様相を示している。(82)は見込み部にジグザグ状ヘラミガキを施すもので、他の和泉型の資料より、やや古い様相を示している。和泉型に属する瓦器碗のうち(82)を除けば八尾市域編年Ⅳ-2-V-2期に当る。

瓦器足釜は2点(85・86)図示できた。(85)は内傾する口縁部に断面三角形の鉢が付く。

瓦器擂鉢(89)は、体部が斜上方へ伸びるもので、口縁部上位が外反し、口縁端部がやや外傾する。内面に8条1単位の擂目が施されている。

瓦質こね鉢(95)は、口縁部が下方に拡張するもので、焼成はややあまく軟質である。

(110)は瓦質の火舎で、外面に菊印花文が押印されている。

中国製磁器は4点(99~102)図示できた。そのうち、青磁が3点(99・101・102)、白磁が1点(100)である。白磁碗(100)は口縁部を外反させ端部に面を持つもので、横田・森田分類の白磁碗Ⅲ-1に当る。(99)は同安窯系青磁で、外面に撚目を施し、内面の上位に沈線を施している。横田・森田分類の同安窯系青磁碗I-1・bに当る。(101)は内面に蓮弁の文様を施文するもので、龍泉窯系青磁と推定される。(102)は外面体部下位が露胎で、釉は発色が悪く黄味がかった青色を呈する。

(103)は瀬戸焼の皿と推定されるもので、白灰色の磁胎に光沢のある緑灰色の釉を内面のみに施されている。内底面にトチン模が遺存している。(106・107)は常滑焼の壺である。(106)は外面に井桁文を押印する。(107)は「く」の字に外反する口縁部から、さらに上方へ立ち上がるもので、端部は窪む。(108・109)はともに備前焼の擂鉢である。(108)は口縁部が上方へやや内傾して伸びるもので、端部は内傾する面を有する。外面に凹線2条が走る。(109)は口縁端部に外傾する面を持つもので、8条を1単位とする擂目が施されている。前者が間壁編年V期、後者かⅢ期に当る。(112)は6条1単位とする擂目を持つもので、胎土は長石・石英を多量に含み、乳灰茶色の色調である。底地は不明である。

屋瓦は、雁振瓦 2 点 (113・114) と平瓦 1 点 (115) を図示した。雁振瓦は中央部が隆起し片側に玉縁が付くものと推定でき、裏面に布目痕、表面に継ぎ方向の板状工具によるナデが施されている。

石製品は石匙 (33)・石鍋 (111)・砥石 (116) がある。石匙 (33) は、横長剝片を素材としている。つまみ部を有し、刃部がつまみに対して垂直になる。材質はサヌカイトで、重量は 15 g を測る。石鍋 (111) は、滑石製で断面台形状を呈する鍋がつく。砥石 (116) は、長方形を呈し、長さ 10.1 cm・幅 3.0 cm・厚さ 0.9 cm を測る。使用面は 2 面、材質は不明である。

#### 参考文献

##### 土釜

菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983

##### 瓦器焼

鶴本久和 「上牧遺跡発掘調査報告書」 高槻市文化財調査報告書13号 1980

(財)八尾市文化財調査研究会 「笠振A 遺跡（第1次調査）」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度」 (財)八尾市文化財調査研究会報告13 1987

##### 東播系須恵器

大村敬通・水口富夫「魚住古窯跡群」兵庫県文化財調査報告書19号 (財)兵庫県文化協会 1983

明石市教育委員会・平安博物館 「魚住古窯跡群発掘調査報告書」 1985

荻野繁春 「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会誌第3号』 1985

##### 備前焼

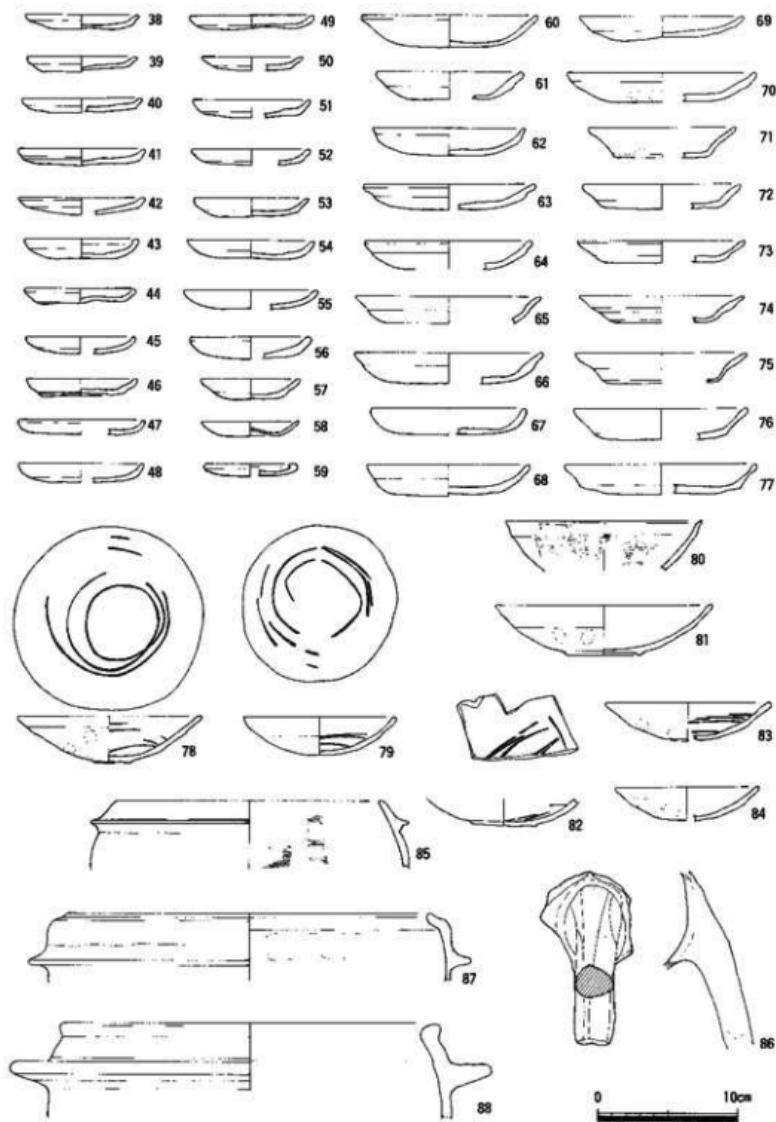
間壁忠彦・間壁寛子 「備前焼研究ノート1・2」

##### 国産陶器

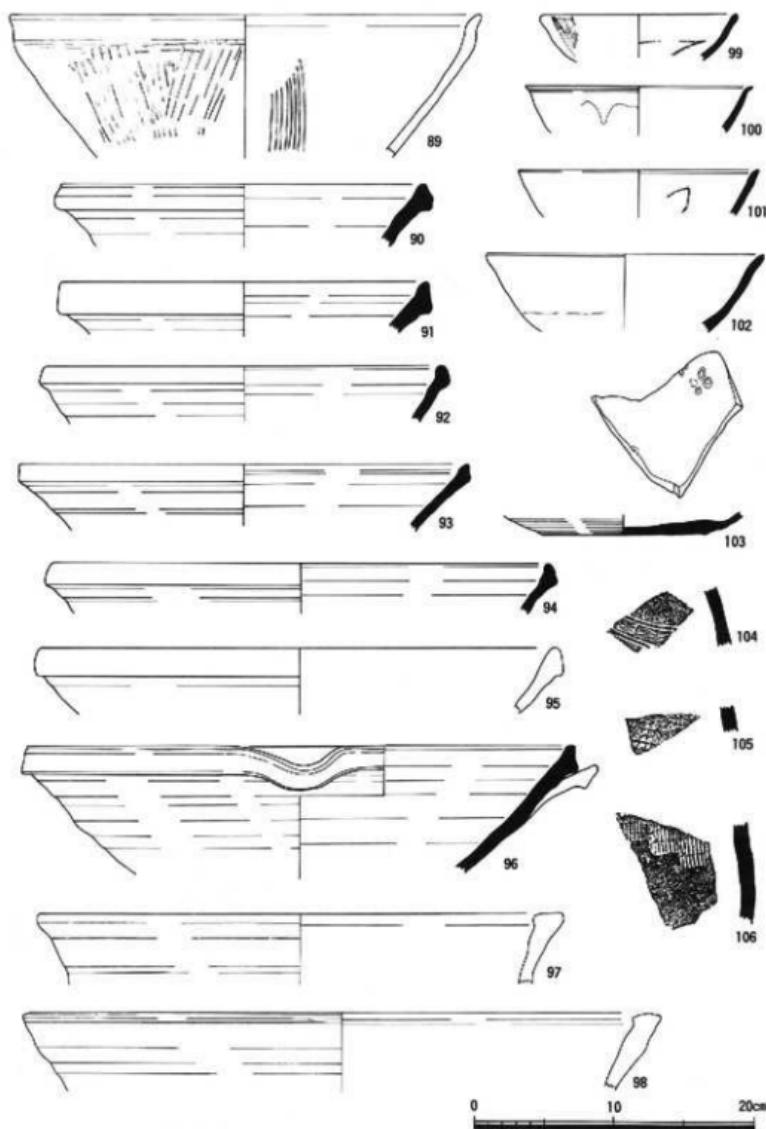
(株)小学館 「世界陶磁全集3 日本中世」 1983

##### 輸入陶磁器

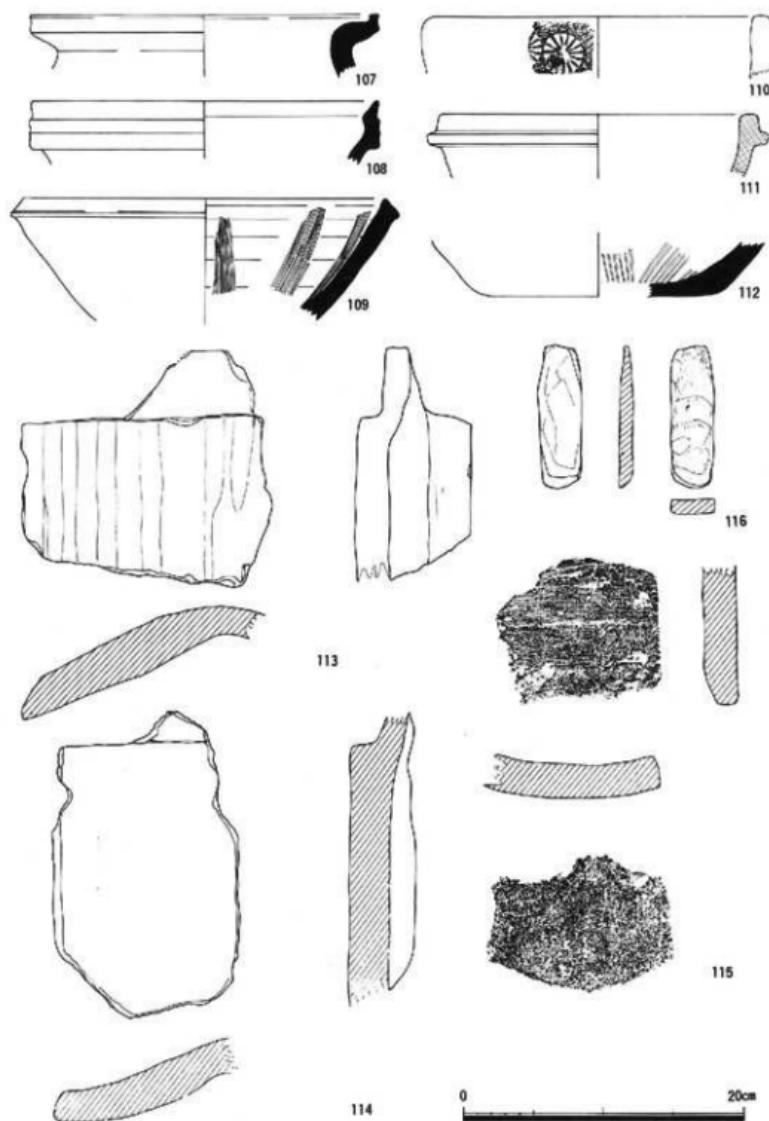
横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論叢4』 1988



第8图 第1调查区包含层出土遗物实测图2



第9図 第1調査区包含層出土遺物実測図3



第10圖 第1調查區包含層出土遺物實測圖 4

## 2) 第2調査区

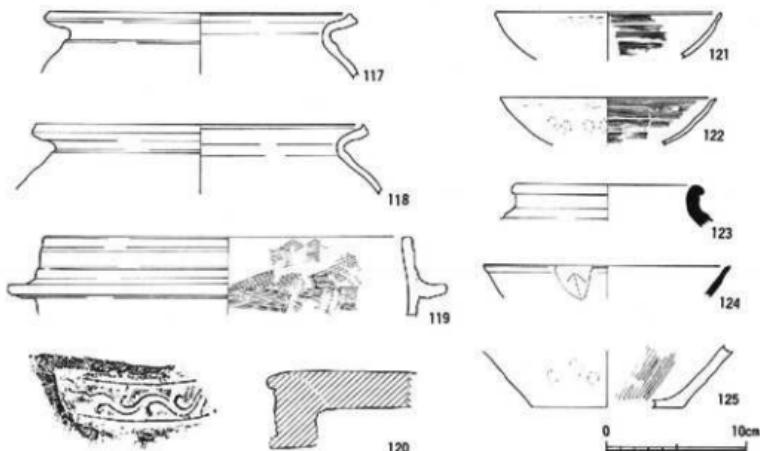
テラス1に設定した調査区で、面積は220m<sup>2</sup>を測る。第2調査区の基本層序は、上層より第1層暗灰色砂質土（耕土）・第2層茶褐色砂質土・第3層淡茶灰色砂質土・第4層黄灰色砂礫土（地山）である。第1調査区と同様、第3層上面および地山面の二面（第1調査面・第2調査面）を調査対象としたが、第1調査面（現地表下0.4m・標高61.5m）においては、顯著な遺構は認められなかった。第2調査面（現地表下0.6~1.0m・標高61.0~61.3m）では、地山面が調査区の中央部を境に北側に傾斜していることが判明した。

遺物は主に第2層から出土した。出土遺物の内訳は、弥生土器壺4・土師器小皿232・土釜7、瓦器碗128、瓦質擂鉢1、備前焼壺1、軒平瓦1である。ほとんどが小破片のため図示できたものは少なく、土師器土釜3（117~119）、瓦質擂鉢（125）、瓦器碗2（121・122）、備前焼壺（123）、軒平瓦1（120）の8点である。

土師器土釜（117・118）は、口縁部が「く」の字に外反し、端部は上方へつまみ上げ気味に終る。胎土はクサリ礫を含み、色調は乳茶色である。菅原分類の大和I型bに当る。（119）は直立する口縁部を持ち肩部に鈎をめぐらすもので、口縁部外面に段を2段有する。菅原分類の河内D型aに当る。

瓦器碗（121・122）は、ともに口縁部内端面に1条の沈線を残らず大和型の瓦器碗である。形態の特徴から川越編年の第Ⅲ段階B型式ないしはC型式に比定されよう。

瓦質擂鉢（125）は、乳灰色の色調で、胎土には長石粒を多量に含んでいる。擂目は10本を



第111図 第2調査区(117~123・125)・第3調査区(124) 包含層出土遺物実測図

1単位(幅2.5cm)としている。

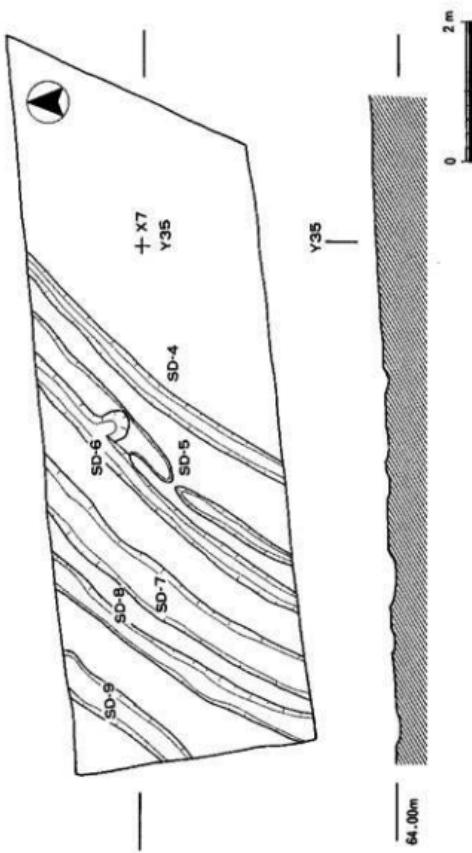
(123)は備前焼の壺で、口頸部が直線的に立ち上がり、口縁部が折り返されている。

(120)は瓦当面に対して左側が遺存するもので、他の出土例からみて中央に半截の花菱文を飾る均正唐草文軒丸瓦である。頸は段頸である。同意匠の軒丸瓦が、本調査地北方約100mに位置する大光寺跡(八尾市楽音寺)と南東約700mに位置する蘭光寺跡(八尾市神立)から出土している。

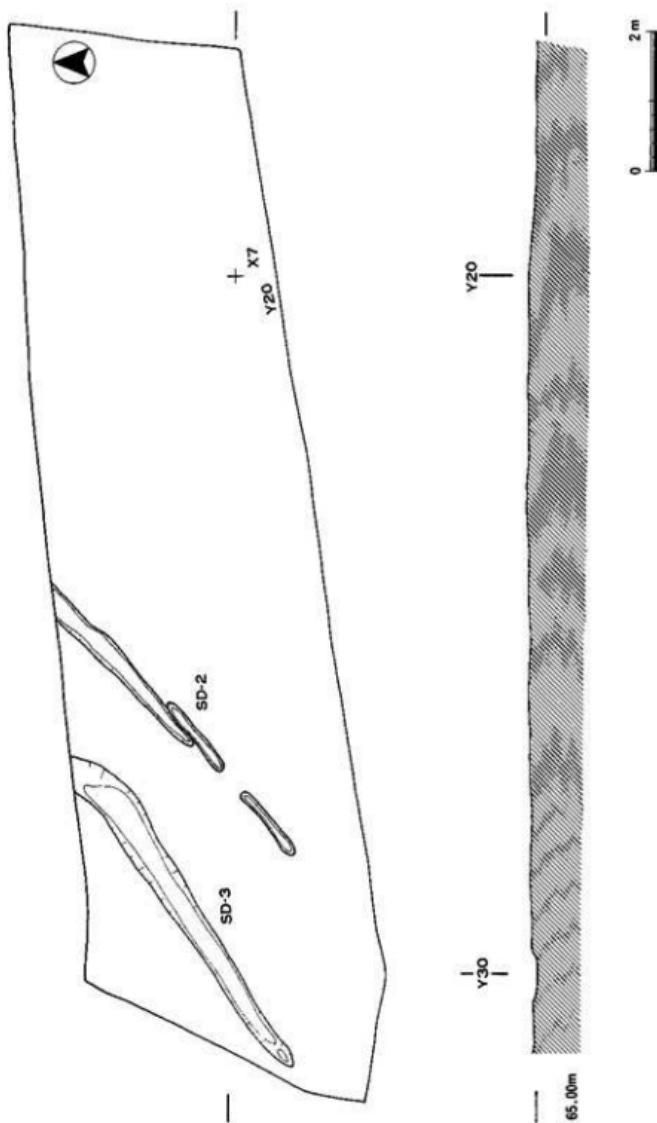
### 3) 第3調査区

テラス3・4の南部に東西方向

に設定した調査区で、テラス3を西区、テラス4を東区と呼称した。面積は75m<sup>2</sup>を測る。東区と西区は比高差約1mで東区が高い。2面(第1調査面・第2調査面)を調査対象面とした。両区の基本層序は、上層より、第1層暗灰色砂質土(耕土)・第2層灰青色砂質土(床土)・第3層灰褐色砂質土第4層黄褐色砂礫土(地山)である。両区とも第1調査面は第3層上面を調査対象とした。その結果東区では、溝2条(SD-2・3)西区で溝6条(SD-4~9)を検出した。これらの溝は、すべてテラスに対して平行方向に走っているもので、断面の形状がU字を呈し、幅0.15~0.6m・深さ0.02~0.1mを測る。内部堆積土は灰色砂質土1層で充填されている。形状からみて、農耕に関連した整溝と考えられる。第2調査面は、東区・西区ともに第1調査面より約0.2m下部に存在する第4層上面を調査



第12図 第3調査区(西区)第1調査面検出構造断面図



第13図 第3調査区(東区)第1調査面検出遺構断面図

対象とした。その結果、地山面が西に向かって傾斜していることが確認できた。

遺物は第1層・第2層および小溝内から出土した。出土遺物の内訳は土器器小皿56・土釜9須恵器体2・瓦器柄22・小皿6・中国製磁器2の土器類の他、屋瓦4である。すべて小破片のため図示できたものは、青磁碗1点(124)である。(124)は龍泉窑系青磁碗で外面に蓮弁文を有する。

## 第4章 出土遺物観察表

SK-1

遺物番号 開拓番号	器種	(cm) 寸法量 器高	成形・調査技法	色調	胎	上	況成	備 考 遺 存 率
1	土器器 小皿	8.8 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底 部外面ナデ。	淡茶灰色	密		良好	%
2	土器器 小皿	7.2 1.1	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部および底部外面ナデ。	乳灰茶色～ 乳白色	やや粗		良好	ほぼ完形
3	土器器 小皿	7.8 1.4	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部および底部外面ナデ。	乳灰茶色	密		良好	%
4	土器器 小皿	9.4 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部および底部外面弱いナデ。	乳茶灰褐色	密		良好	%
5	土器器 小皿	8.4 —	手づくね成形。口縁部内外面および体部内 面ヨコナデ。他はナデ。	乳赤茶色	やや粗 灰石 (0.1～0.3mm) くさり繊を含む		良好	%
6	土器器 小皿	9.1 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面ナデ。	淡灰茶色～ 乳灰茶色	やや粗		良好	%
7	土器器 小皿	9.7 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。他 はナデ。	乳灰茶色	やや粗 くさり繊を 散見する		良好	%
8	土器器 小皿	9.9 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部内面ナデ。体部外表面須压成形後ナデ。	淡乳茶色	密		良好	%
9	土器器 小皿	10.0 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体 部内面ナデ。体部外表面須压成形後ナデ。	淡灰茶色～ 乳灰茶色	密		良好	%

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 径 高 法量	成形・調葉技法	色調	施土	焼成	備考 保存率
10	土師器 小皿	8.7 —	手づくね成形。口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。体部外側指頭圧痕遺存。	乳灰色	密	良好	%
11	土師器 小皿	9.2 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	淡灰茶色	密	良好	%
12	土師器 小皿	10.0 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外側指頭圧痕遺存。	淡乳茶色	密	良好	%
13	土師器 小皿	9.7 —	手づくね成形。口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。体部外面指頭圧成形後ナデ。	乳灰茶色	密	良好	%
14	土師器 小皿	11.0 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外側指頭圧成形後ナデ。	淡乳茶色～ 淡灰茶色	密	良好	%
15	土師器 小皿	10.2 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧痕遺存。	淡乳茶色	密	良好	%
16	土師器 小皿	11.6 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧成形後ナデ。	乳灰茶色	密	良好	%
17	土師器 小皿	10.7 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外側指頭圧痕遺存。	淡灰茶色～ 乳灰茶色	密	良好	%
18	土師器 小皿	10.5 —	手づくね成形。口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。他はナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	%
19	土師器 中皿	12.8 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。他はナデ。	乳灰茶色	密	良好	%
20	土師器 中皿	12.2 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。口縁部外側に指頭圧痕遺存。	淡灰茶色	密	良好	%
21	土師器 中皿	13.4 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	淡灰茶色	やや粗	良好	%
22	瓦器 碗	12.2 —	L1縁部内外面ヨコナデ。体部外側指頭圧成形後ナデ。体部内側数条のヘウミガキ。	淡灰茶色～灰 色	やや粗	良好	%
23	瓦器 足蓋	18.5 — 周径 23.5	マキアゲ成形。口縁部内外面および底部ヨコナデ。他はナデ。	灰白色～暗 灰色	やや粗 長石・石英 (0.1～2 mm) を含む	良好	%

遺物番号 同種番号	器種	(cm) 口徑 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 参考 保存率
24 五	瓦器 足盤	— —	胸部のみ残存。手づくね成形。表面ナデ。	暗灰色～灰 白色	やや粗	良好	
25	瓦質 火鉢	29.6 —	マキアゲ成形。内外面ともヨコナデと思 われる。	暗灰色	やや粗	良好	3%
26 五	須恵器 鉢	29.4 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面回 転ナデ。口輪部外面に重ね燒痕。	灰色～暗灰 色	やや粗 長石 (0.1～0.5mm) を含む	堅緻	東播系 3%以下
27 五	須恵器 鉢	29.0 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面回 転ナデ。口縁部外面に重ね燒痕。口縁部外面 に自然輪行筋。	灰白色～暗灰 色	やや粗 長石 (0.1～0.5mm) を含む	堅緻	東播系 3%以下
28	須恵器 鉢	30.8 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面回 転ナデ。口縁部外面に重ね燒痕。	灰色～暗灰 色	やや粗 長石 (0.5～1mm) を多量に含む	堅緻	東播系 3%以下
29	陶器 擂鉢	30.0 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部および体 部内外面回転ナデ。体部内面に8本/2.1cmを 一単位とする模様工具による縞目を施す。	灰色～暗茶 灰色	粗 長石(0.5～3mm)の長石 を多量に含む	堅緻	備前統 3%
30 五	平瓦	— —	表面右側面存。表面縁口タタキ道存。滴 垂はヘラケズリにて取りり。	暗灰色～灰 色	粗 (0.5～1mm)の長石 を含む	良好	

## SD-1

遺物番号 同種番号	器種	(cm) 口徑 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 参考 保存率
31 五	瓦質 土管	10.6 —	内外面上位ヨコナデ。内面中位以下布目表 面存。外面中位以下ナデ。	暗灰色	やや粗 長石・石英 (0.5～1mm) を含む	良好	
32 五	瓦質 土管	13.5 —	内外面上位ヨコナデ。内面中位以下横方向 の板状工具によるナデ。一部に布目表面存。 外面中位以降ナデ。	暗灰色	粗	良好	

## 第1調査区包含層

遺物番号 同種番号	器種	(cm) 口徑 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 参考 保存率
33 九	石匙	長さ 幅 厚さ 重さ 5.3 4.2 0.7 15g	横長削片を素材。 つまみ器を有し、刃部がつまみに対して垂直になる。	暗灰色	—	—	2A区 サヌカイト
34 九	須恵器 長颈瓶	8.0 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部および瓶 部内外面および体部内面回転ナデ。体部外側 ナデ。瓶部中位付近に二条の波線が浅く認る。	暗灰色	やや粗 長石 (0.1～1mm) を含む	堅緻	2A・B区 口縁部以上
35 九	円筒埴輪	体部径14.9 タガ径15.7	マキアゲ成形。体部内面指ナデ。体部外側 タガハケ(9本/cm・15本/cm)。タガは低く偏 平。タガ部ヨコナデ。	赤茶色	粗	良好	4A区

遺物番号 団体番号	器種	(cm) 径 法量 高さ	成形・溝 縫合技術	色 調	胎 上	焼 成	備 考 存 在
36 九	円筒埴輪	— 体部径17.8 タガ径18.6	マキアゲ成形。体部内面指捺。体部外側 タハケ(8率/cm)。タガは近く偏平。タガ ヨコナダ。	淡赤茶色	密	良好	3B区
37 九	十輪器 裏	— 体部最大径29.3	マキアゲ成形。体部および底部内面指捺压 痕遺存。体部および底部外面ハケナダ(5率 /cm)。	赤茶色	やや粗 長石・チャート (0.1~3mm) を多量に含む	良	3A区 底部から体 部中位遺存
38 六	十輪器 小粗	8.0 1.0	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナダ。体 部および底部内面ナダ。体部および底部外面 指捺压痕成形後弱いナダ。	乳灰茶色	やや粗	良好	4B区 完形
39 六	十輪器 小粗	7.6 1.1	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナダ。体 部および底部内面ナダ。体部および底部外面 指捺压痕成形後弱いナダ。底部外側指捺压痕 遺存。	淡灰色	密	良好	4A区 3/4
40	十輪器 小粗	8.3 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナダ。底 部内外面ナダ。	淡灰茶色~淡 灰茶色	やや粗 長石 (0.1~0.5mm) くさり塵を含む	良好	4A区 3/4
41	土師器 小粗	8.8 1.2	手づくね成形。口縁部内外面および体部内 面ヨコナダ。体部外面ナダ。	淡茶色~淡 赤茶色	やや粗 長石 (0.1~0.5mm) を含む	良好	2A区 3/4
42	十輪器 小粗	8.8 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナダ。底 部内外面ナダ。	淡茶灰色	密	良	2A区 3/4
43	十輪器 小粗	7.9 1.4	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナダ。体 部および底部内外面ナダ。	淡赤茶色	密	良好	4A区 3/4
44 六	十輪器 小粗	7.6 1.0	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナダ。体 部および底部内外面ナダ。	淡灰茶色~乳 茶色	やや粗	良好	3B区 ほぼ完形
45	土師器 小粗	7.5 —	手づくね底形。口縁部外面ヨコナダ。体 部内外面ナダ。体部外面の一部に粘土結合痕 遺存。	淡灰茶色	密	良好	3B区 3/4
46 六	十輪器 小粗	7.6 1.2	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナダ。体 部および底部内外面指捺压痕成形後ナダ。底部 外面の一部に粘土結合痕遺存。	淡灰茶色~乳 茶色	密	良好	3B区 ほぼ完形
47	十輪器 小粗	8.7 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナダ。底 部内外面ナダ。	乳灰色	密	良好	3B区 3/4
48	十輪器 小粗	8.6 —	手づくね底形。口縁部内外面ヨコナダ。底 部内外面ナダ。	乳灰茶色	密	良好	4A区 3/4
49	十輪器 小粗	8.6 —	手づくね底形。口縁部内外面ヨコナダ。底 部内外面ナダ。	淡灰茶色	やや粗	良好	4A区 3/4

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 基部	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 保存状
50	土器 小皿	7.1 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナダ。	淡茶灰色	密	良好	3 A 区 3/4
51	土器 小皿	8.2 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナダ。	淡茶灰色～ 淡灰色	密	良好	4 A 区 3/4
52	土器 小皿	8.2 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナダ。口縁部内面および外側の口縁部と体部の境に粘土結合痕道存。	淡灰色	密	良好	3 B 区 3/4
53	土器 小皿 六	8.0 1.4	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナダ。体部外側指圧成形後弱いナダ。体部外側の一部に粘土結合痕道存。	淡灰茶色～ 淡赤茶色	密	良好	4 A 区 ほぼ完形
54	土器 小皿 六	8.9 1.3	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナダ。	淡灰茶色	やや粗	良好	4 A 区 3/4
55	土器 小皿	9.4 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナダ。体部外側粘土結合痕道存。	淡茶灰色	密	良好	4 A 区 3/4
56	土器 小皿	8.4 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナダ。体部外側弱いナダ。	乳灰色	密	良好	4 A 区 3/4
57	土器 小皿	7.0 1.5	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナダ。体部外側指圧成形後弱いナダ。	乳灰茶色	密	良好	4 A 区 3/4
58	土器 小皿 六	6.8 1.1	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内外面ナダ。	乳白色	密	良好	2 B 区 3/4
59	土器 小皿	6.3 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。後に端部を折り曲げる。体部内外面ナダ。	淡茶赤色	密	良好	4 A 区 3/4
60	土器 中皿 六	12.2 2.3	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内外面ナダ。	淡灰色	やや粗	良好	4 A 区 3/4
61	土器 小皿	10.0 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナダ。	乳灰色	やや粗	良好	4 A 区 3/4
62	土器 中皿	10.7 2.0	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナダ。	乳灰色	密	良好	4 A 区 3/4
63	土器 中皿 六	12.0 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナダ。底部外側弱いナダ。	淡灰茶色～ 乳茶色	密	良好	4 A 区 3/4

遺物番号 同族番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技術	色調	胎	土	焼成	備考 保存率
64	上部器 中皿	11.6 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外縁指彫圧成形後削いナデ。	淡灰茶色	密		良好	3B区 1/4
65	上部器 中皿	12.9 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ、施はナデ。	乳灰茶色	密		良好	2A区 1/4
66	土師器 中皿	13.1 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。	乳灰色	密		良好	3B区 1/4
67	土師器 中皿	10.7 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。	乳赤茶色	密		良好	3B区 1/4
68	土師器 中皿	11.4 2.2	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。体部および底部外縁削いナデ。	淡赤茶色	やや粗 くさり跡を 含む		良好	4A区 ほぼ完形
69	土師器 中皿	11.6 1.5	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。	淡乳灰色	密		良好	4B区 1/4以上
70	土師器 中皿	13.3 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外縁指彫圧成形後削いナデ。	淡灰茶色	密		良好	4A区 1/4
71	土師器 中皿	10.4 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外縁指彫圧成形後削いナデ。	乳灰茶色	密		良好	3B区 1/4
72	土師器 中皿	11.1 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。	乳灰色～乳 灰茶色	密		良好	3B区 1/4
73	土師器 中皿	11.8 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。	乳灰色～淡 灰茶色	密		良好	2A区 1/4
74	上部器 中皿	11.6 —	手づくね成形。口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。体部外縁ナデ。	乳灰茶色	密		良好	2A区 1/4
75	土師器 中皿	12.1 —	手づくね成形。口縁部内外面および体部内面ヨコナデ。底部内面一部ナデ。体部外縁指彫圧成形後削いナデ。	淡灰茶色	密		良好	3B区 1/4
76	土師器 中皿	12.2 —	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。	淡茶色～乳 灰茶色	密		良好	4B区 1/4
77	土師器 中皿	13.3 2.1	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内面ナデ。	乳灰茶色	密		良好	2B区 1/4
六								

遺物番号 記版番号	器種	(cm) 口径 法身 器高	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 遺存率
78	瓦器 瓶	12.9 3.3 高台径 2.4 高台高 0.2	口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕直存。内面見込みから体部にかけて巻き状ヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	灰白色-暗 灰色	密	良好	2B区 ほぼ光沢 外表面に重ね 焼痕
79	瓦器 瓶	10.8 2.7	口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕直成形後ナデ。内面見込みから体部にかけて巻き状ヘラミガキ。	灰白色-暗 灰色	密	良好	3A区 完形 内外面に重ね 焼痕
80	瓦器 瓶	14.0 -	口縁部外面ヨコナデの接瓣なヘラミガキ。体部内外面直成形後ナデ。内面見込み部風化が著しく調整不良。高台部周辺ヨコナデ。	灰白色-暗 灰色	やや粗	良好	4A区 大型 %
81	瓦器 瓶	15.2 3.6 高台径 5.0 高台高 0.3	口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕直成形後ナデ。体部外面に指頭圧痕直存。体部内面および見込み部風化が著しく調整不良。高台部周辺ヨコナデ。	灰白色-暗 灰色	密	良好	4A区 %
82	瓦器 瓶	- 高台径 4.6 高台高 0.3	見込み部にジグザグ状ヘラミガキを施す。体部外面指頭圧痕直成形後ナデ。高台部周辺ヨコナデ。	暗灰色	密	良好	4A区 %
83	瓦器 瓶	11.7 2.7 高台径 2.2 高台高 0.1	口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕直存。内面体部から見込みにかけて巻き状ヘラミガキ。高台部周辺ヨコナデ。	灰白色-暗 灰色	密	良好	2A区 %
84	瓦器 瓶	10.0 -	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部外面指頭圧痕直成形後弱いナデ。体部内面のヘラミガキは不明である。	灰白色-暗 灰色	やや粗	良好	4A区 %
85	瓦器 足盤	18.7 - 直径 22.6	マキアゲ成形。口縁部内外面および脚部ヨコナデ。体部内面ハケナデ(11本/cm)。体部外表面ナデ。	暗灰色-灰 白色	密	良好	5・6B区 %
86	瓦器 足盤	- -	丁づくね成形。表面ナデ。脚部と体部の接合部外面に炭化物付着。脚部のみ遺存。	灰白色-淡 灰色	やや粗	良好	2A区
87	土器器 土釜	25.7 - 直径 31.5	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面指ナデ。体部外表面ナデ。脚部の上下位ヨコナデ。	淡灰茶色-淡 乳茶色	密	良好	4A区 口縁部%
88	土器器 土釜	26.6 - 直径 34.4	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外表面ナデ。脚部の上下位ヨコナデ。体部外表面脚部以下煤付着。	淡赤茶色	やや粗 石英・長石 (0.5~2mm) を多量に含む	良好	4B区 %
89	瓦質 埴輪	33.5 - 七	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヨコナデ。体部外表面指頭圧痕直成形後口縁部には横位の判明ハケナデ(3本/cm)。体部は複数のハケナデ(3本/cm)。体部外表面に塗付着。体部内面 8本/2.6cm を一単位とする棒状工具による擦りを施す。	灰白色-灰 褐色	やや粗	良好	4B区 %
90	埴器 鉢	25.8 - 七	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外表面削除ナデ。内外面に重ね焼痕直存。	暗灰色-灰 色	やや粗 長石・石英 (0.1~0.5mm) を含む	堅緻	4B区 東播系 口縁部以下
91	埴器 鉢	26.0 - 七	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。内面に重ね焼痕直存。	淡灰色-灰 色	やや粗	堅緻	4A区 東播系 口縁部以下

遺物番号 採取番号	器種	(cm) 口径 基部 器高	成形・病変 技法	色調	胎	土	焼成	備考 遺存率
92	須恵器 鉢	28.4 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部および体部内外面回転ナダ。内外面に重ね焼痕遺存。	暗灰色～淡 灰色	やや粗		堅焼	5・6B区 東播系 口縁部5% 以下
93	須恵器 鉢	31.9 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面および体部外周に重ね焼痕。口縁部外周沿部に自然粘付着。	暗灰色～灰 色	やや粗		堅焼	2A区 東播系 %
94	須恵器 鉢	35.4 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部および体部内外面回転ナダ。内外面に重ね焼痕遺存。	暗灰色～淡 灰色	やや粗 長石 (0.1～0.5mm) を含む		堅焼	5・6B区 東播系 口縁部5% 以下
95	瓦質 こね鉢	37.0 —	マキアゲ成形。口縁部内外面および体部外面上位ヨコナダ。体部中位以下には横位のハラ割り。体部内面ナダ。	灰白色～暗 灰色	やや粗		良	2B区 %以下
96	須恵器 鉢	38.8 — 片口幅 6.2	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面および体部外周に重ね焼痕ナダ。体部内面ナダ。I1縫	淡灰色～暗 灰色	やや粗		堅焼	3A区 東播系 %
97	土器器 甕	37.4 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。	淡茶色	密		良好	2A区 %以下
98	土器器 甕	44.2 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナダ。体部内外面回転ナダ。	灰色～淡乳 白色	やや粗 長石・石英・チャート (0.1～0.5mm) を含む		良好	4A区 口縁部5% 以下
99	青磁 碗		ロクロ成形。口縁部内外面ともに回転ナダと思われる。口縁部から体部外周に横目を施す。口縁部内面に沈模状の施文が認められるが、全容は不明である。	輪 緑灰色 磁胎 白灰色	緻密		堅焼	2B区 河安窯系 %
100	白磁 碗	16.2 —	ロクロ成形。口縁部内外面回転ナダ。口縁部外周に輪空が認められる。	釉色 乳白色 磁胎 白灰色	緻密		堅焼	3A区 %
101	青磁 碗	17.0 —	ロクロ成形。口縁部および体部内外面ともに回転ナダと思われる。口縁部内面上位に沈模状、体部内面に蓮華文の施文を施す。釉は焼失で薄い。	釉色 灰綠色 磁胎 灰白色	緻密		堅焼	6B区 龍泉窯系 %以上
102	青磁 碗	19.7 —	ロクロ成形。口縁部および体部内外面回転ナダ。体部外周下位は露胎。	釉色 灰綠色～乳 灰青色 磁胎 灰白色	緻密		堅焼	3B区 %
103	陶器 大皿	— 底径 11.6	ロクロ成形。底部外周回転ケズリ。底部内面および内底面回転ナダ。外底面回転糸切り痕遺存。内底面にトラン波痕。	褐色 灰褐色 磁胎 乳白色	密		堅焼	2A区 貴瀬(?) 底部5%
104	須恵器 不明	— —	マキアゲ成形。体部内外面回転ナダ。体部外周に上下に二条の沈模を施し、沈模間に窓を一单位とする押印を施す。	灰白色	密		堅焼	4A区 体部片
105	須恵器 甕?	— —	マキアゲ成形。体部内外面回転ナダ。体部外周に格子目タキ印遺存。	灰色～淡灰 色	やや粗		堅焼	4A区 体部片

遺物番号 団版番号	器種	(cm) 口径 法蓋 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 倉庫 在庫
105 八	陶器 壺	— —	マキアゲ・ミズビキ成形。体部内面回転ナデ。体部外面上面文を施す。	赤茶色～淡 赤茶色	やや粗 長石・石英・チャート (0.5～1mm) を含む	堅焼	2 A 区 常滑燒 口縁部 1/2以下
107	陶器 壺	24.5 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面回転ナデ。口縁部内外面灰かぶり。	茶灰色～灰 色	密	堅焼	4 A 区 常滑燒 口縁部 1/2以下
108	陶器 擂鉢	24.6 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部および体部内外面回転ナデ。内面に自然釉付着。口縁部外面に二段の凹線が認る。	淡赤紫色～ 淡灰綠色	緻密	堅焼	5・6 B 区 備前燒 口縁部 1/2以下
109 八	陶器 擂鉢	25.6 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部ヨコナデ。他は回転ナデ。体部内面に8本/1.8cmを一基位とする櫛状工具による擦目を施す。内面灰かぶり。	灰色～暗灰 色	やや粗 長石・石英・チャート (0.1～1mm) を含む	堅焼	4 A 区 備前燒 口縁部 1/2以下
110 八	瓦質 火鉢	23.6 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデと思われる。口縁部外面上位に希有花文を押す。	灰白色～暗 灰褐色	密	良好	2 A 区 1/2以下
111 八	石鍋	22.3 — 銘径 24.4	内外面ともにノミによる成形の後に表面を平滑に仕上げる。滑石製。	淡灰色	—	—	4 B 区 口縁部 1/2
112	陶器 擂鉢	— — 底径 14.4	マキアゲ・ミズビキ成形。体部および底部外側回転ナデ。体部内面に6本/1.8cmを一基位とする櫛状工具による擦目を施す。	乳灰茶色	やや粗 長石・石英 (0.1～1mm) を含む	堅焼	3 B 区 底部1/2のみ
113 八	摩打瓦	— —	表面はナデ。側面はナデによる面取りを施す。裏面に布目焼遺存。	暗灰色	粗 長石・石英 (0.1～5mm) を多量に含む	良好	3 A 区
114 八	磨振瓦	— —	表面はナデ。側面はナデによる面取りを施す。裏面の一部に布目焼遺存。	淡茶色～灰 褐色	粗 長石・石英・チャート (0.1～2mm) を多量に含む	良好	2 A 区
115	半丸	— —	表面布目焼遺存。裏面は風化のため調査不明。端面はヘラ状工具による面取りを施す。	灰褐色	粗 石英・長石 (0.1～3mm) を多量に含む	良好	4 A 区
116 八	砾石	長さ 10.1 幅 3.0 厚さ 0.9	使用面は二面である。材質は不明。	灰色～暗灰 色	—	—	2 B 区

第2調査区・第3調査区包含層

遺物番号 団版番号	器種	(cm) 口径 法蓋 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 倉庫 在庫
117 九	土師器 上蓋	21.2 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面の一部にハケメが遺存。体部外側ナデと思われる。体部内面に灰化物付着。	乳茶色	密	良好	第2調査区 4 F 区 口縁部 1/2
118	土師器 上蓋	23.3 —	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面の一部にハケメが遺存。体部外側ナデと思われる。体部外側に保有者	淡灰茶色～ 乳茶色	密	良好	第2調査区 5 F 区 口縁部 1/2

遺物番号 同版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎 土	焼成	備 考 収 存 率
119 九	十輪器 上半	26.0 — 鉢径 31.4	マキアゲ成形。口縁部および体部内面ハケナデ(8本/cm)。口縁部および体部外側ナデ。脚部弱いナデ。脚部以下に焼付泥。	淡丸茶色～ 淡青茶色	密	良好	第2調査区 4・5F区 1/6
120 九	軒平瓦	— —	表面の一部に布目焼造存。裏面はナデ。側面は削取りを施す。器は没頭で、丁寧なナデを施す。瓦当面に対して左側が焼存し、瓦当面には唐草文を施す。	灰色～暗灰色	やや粗 長石・石英 (0.5～3mm) を多量に含む	良好	第2調査区 4F区
121	瓦器 碗	16.0 —	口縁部外側ハラミガキ。体部外側指須延成形後弱いナデ。口縁部および体部内面密なハラミガキ。口縁部内周端部に一条の沈線が残る。	灰黑色～灰白色	精良	良好	第2調査区 4・5F区 大和型 1/4
122	瓦器 碗	15.3 —	口縁部外側ハラミガキ。体部外側指須延成形後弱いナデ。体部外側指須延焼造存。口縁部および体部内面密なハラミガキ。口縁部内周端部に一条の沈線が残る。	灰黑色～暗 灰色	精良	良好	第2調査区 4F区 大和型 1/4
123 九	陶器 碗	13.0 —	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面ココナデ。頭部外側面削輪ナデと思われる。	淡赤紫色～ 淡赤茶色	やや粗 長石・チャート (0.5～2mm) を含む	堅硬	第2調査区 4・5F区 偏前段 口縁部1/4
124	青磁 碗	17.6 —	ロクロ成形。口縁部および体部内外面ココナデと思われる。口縁部外側に旋線による溝脊を施す。	褐色 灰綠色 磁胎 灰白色	微密	堅硬	第3調査区 1C区 燒成窯系 口縁部1/4 以下
125	瓦質 擂鉢	— 底径 10.7	マキアゲ成形。底部および体部内面ナデ。底部および体部外側指須延成形後弱いナデ。内面体部から底部にかけて10本/2.6cmを…單位とする標尺工具による横目を施す。	灰白色	密	良好	第2調査区 4F区 底部1/4

## 第5章　まとめ

花岡山遺跡では、当調査（第1次調査）以降、花岡山遺跡学術調査団によって2回（第2次調査・第3次調査）にわたる発掘調査が実施されており多大な成果を上げている。特に、第2次調査<sup>註1</sup>の第6調査区で検出された弥生時代後期の土壙墓や第9調査区で検出された鎌倉時代前期から室町時代前期の建物群は、当地域においては検出例が少ない貴重な資料であるばかりではなく、調査地点が標高60m以上の高所に位置することから、多面的な観点から問題を提供する結果となった。

当調査（第1次調査）で検出した遺構のなかで、第2次調査以降の調査で検出した遺跡と関連するものに第1次調査区のSK-1がある。SK-1を検出した第1調査区の東側には鎌倉時代前期から室町時代前期の建物群を検出した第2次調査の第9調査区が位置している。SK-1は南北方向に伸びる溝状を呈する土坑で、本文でもふれたように炭・灰を含む土層中から土器の小破片および焼土が多量に出上しており、焼土坑の性格を帯びた遺構として捉えることができる。また、SK-1から出土した遺物（夾雜物を除く）は、第2次調査の第9調査区で検出された遺構の中で最も新しい時期に比定される地底状遺構および溝状遺構から出土した遺物と共に特徴を有している。したがって、SK-1は第2次調査の第9調査区で検出した建物群の廃絶時期ないしは廃絶後に近い時期の遺構であることが推定できる。SK-1から出土した遺物の中で、池庭状遺構および溝状遺構の出土遺物と共に土師器小皿（3～18）がある。これらの土師器小皿の特徴は、上げ底の底部から屈曲して口縁部が外上方へ外反気味に立ちあがるもので、器壁が薄く色調は褐色系を呈するものが大半を占める。なお、池庭状遺構・溝状遺構からは、これらの土師器小皿とともに同型式の土釜が出土している。土釜は、菅原正明氏分類による大和型<sup>註2</sup>にあたる。この土釜と同型式のものが、奈良市の古市城跡<sup>註3</sup>から脛骨器に転用されたものが出土しており「応永十六年」（1409年）の墨書き銘が記されている。以上から、これらの遺構の廃絶時期を15世紀前半の一時期に推定することが可能である。また、これらの土師器小皿は、和泉型瓦器碗の終末期に比定されるものと共に伴する例が知られており、和泉型瓦器碗の消滅時期を15世紀前半とする説とも符合している。

註1 花岡山遺跡学術調査団『河内花岡山遺跡』大阪経済法科大学考古学研究報告第9集 1988

註2 菅原正明『畿内における土釜製作と流通』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1987

註3 奈良市教育委員会『古市城跡発掘調査報告書』『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和55年度』 1981

# 図 版



第1調査区 第1調査面全景(南から)



同上 第2調査面全景(南から)



第1調査区 SK-1全量（南から）



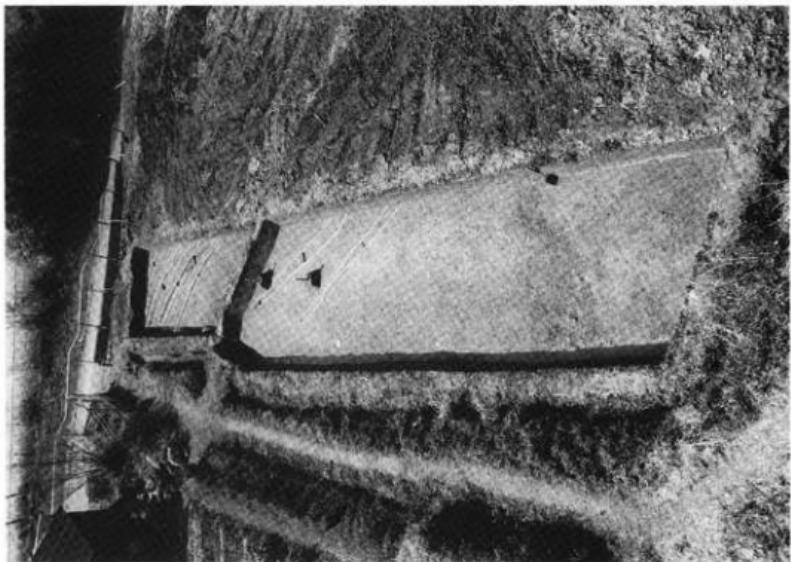
第1調査区 土師器甕出土状況(東から)



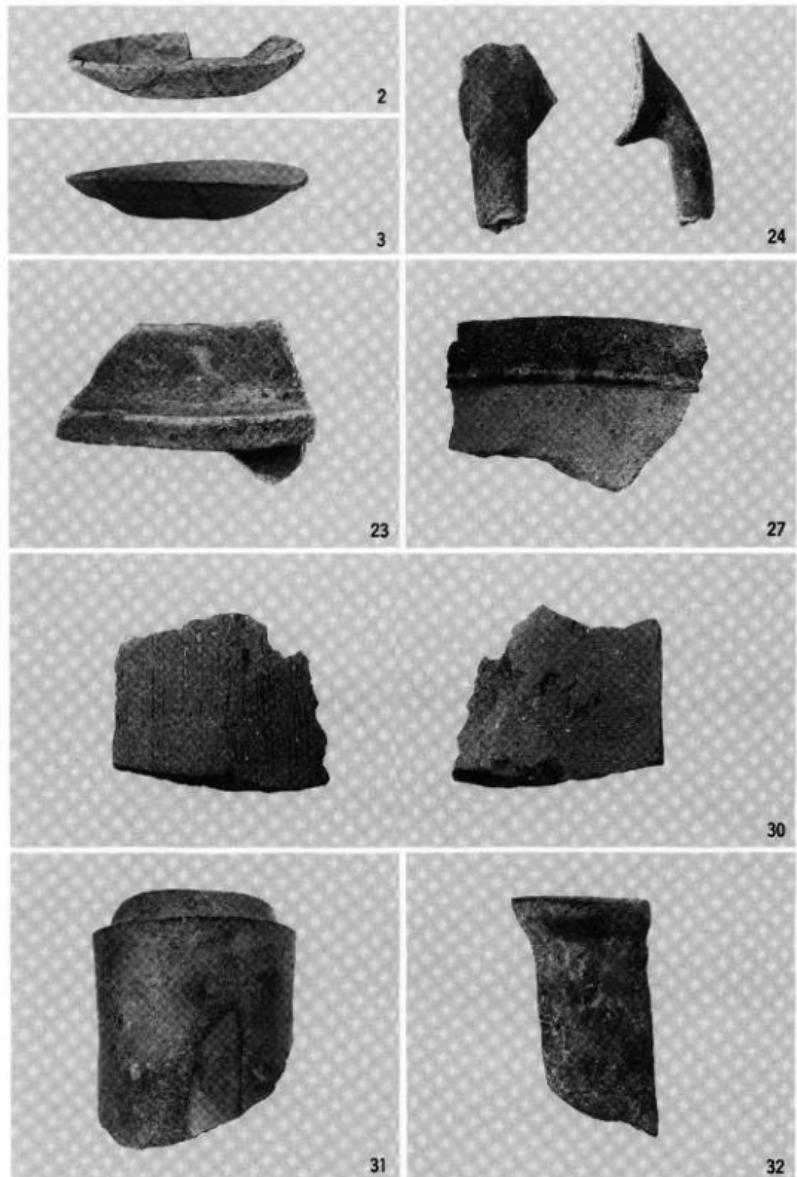
同上 屢振瓦出土状況(北から)



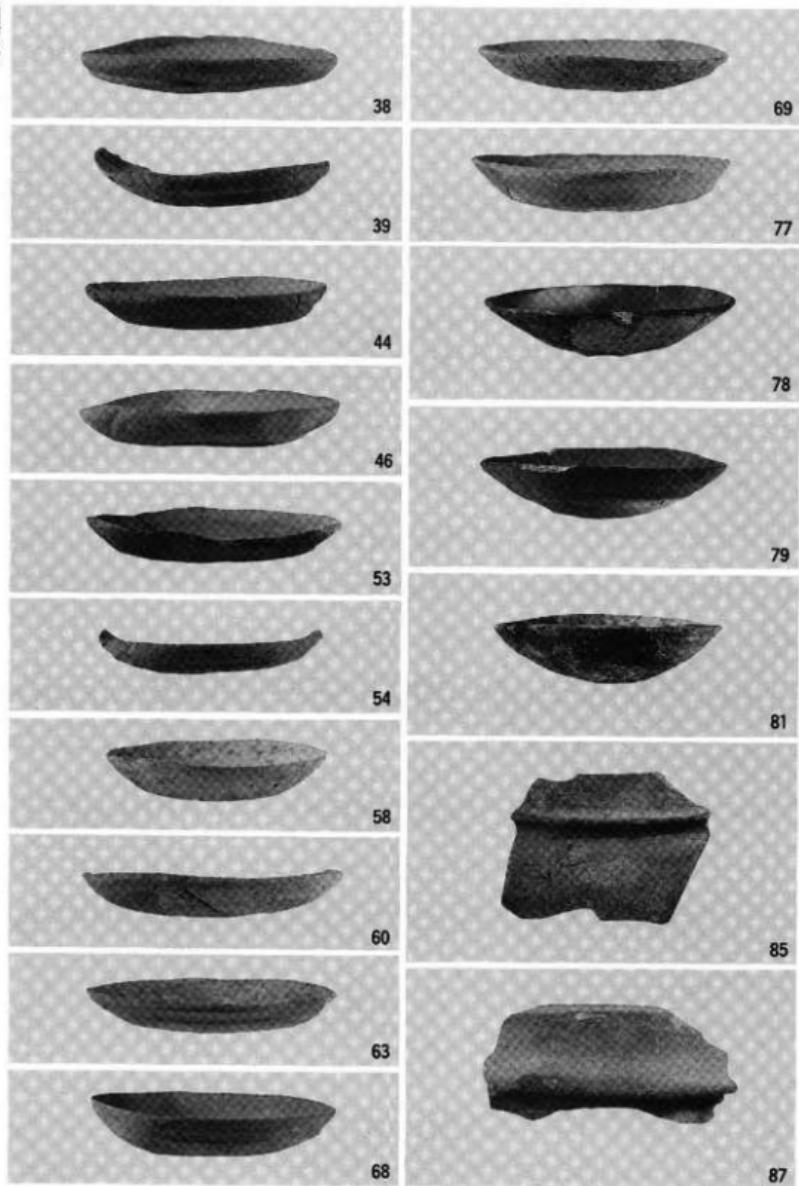
第2調査区 第2調査面全景(南から)



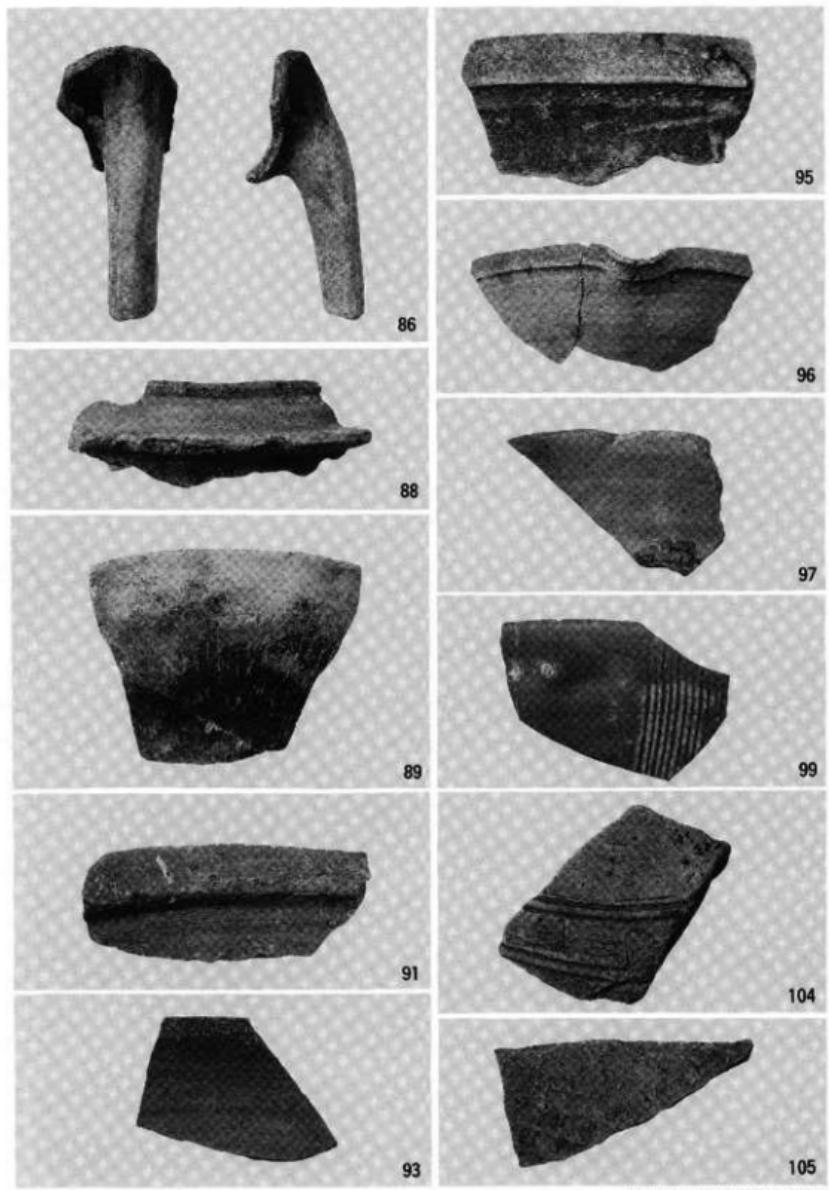
第3調査区 第1調査面全景(東から)



第1調査区SK-1 (2・3・23-24-27) SD-1 (31-32)出土遺物

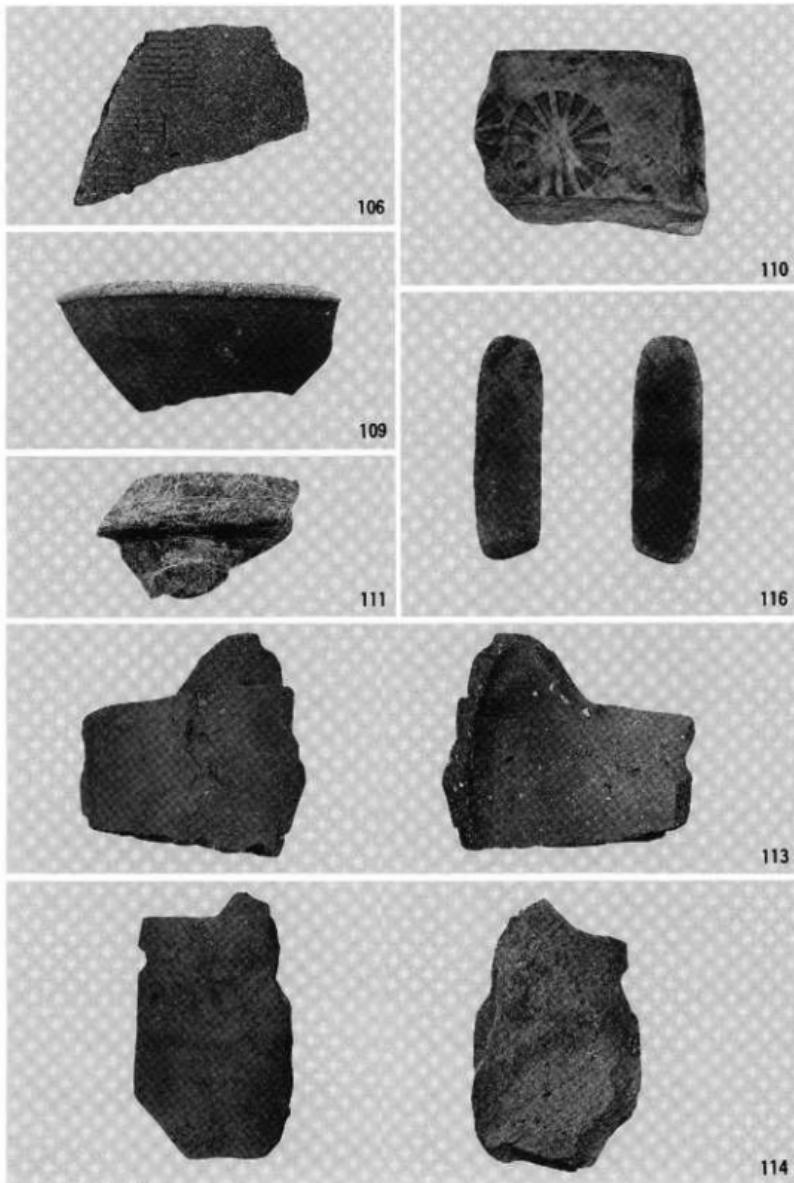


第1調査区包含層出土遺物1

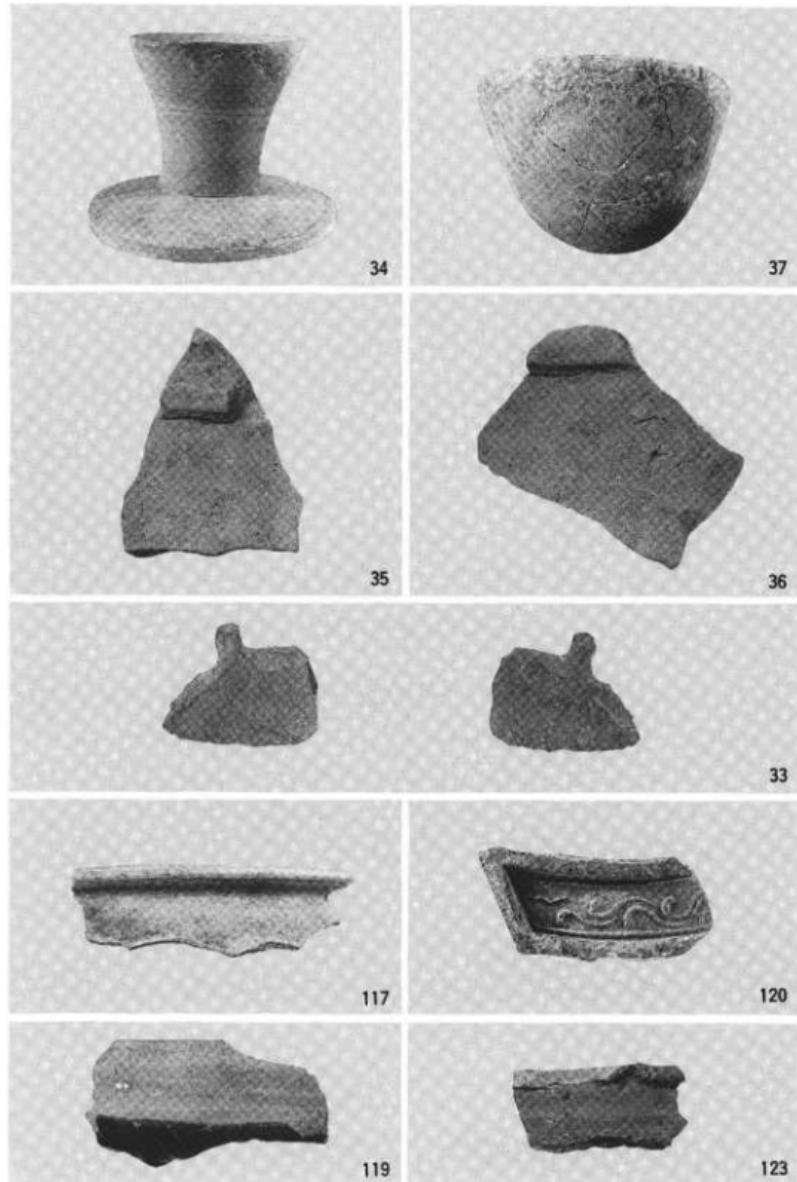


第1調查區包含層出土遺物 2

圖版八



第1調查區包含層出土遺物3



第1調査区(34~37)・第2調査区(117-119-120-123)出土遺物

(財)八尾市文化財調査研究会報告 22

- I 矢作遺跡(第1次調査)
- II 矢作遺跡(第2次調査)
- III 花岡山遺跡(第1次調査)

発行 平成元年9月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会  
〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号  
TEL (0729)94-4700

印刷 近畿印刷センター  
〒582 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号  
TEL (0729)72-5918

表紙 レザック66 (260 kg)  
本文 書籍用紙 (70 kg)  
図版 マットアート (135 kg)

